
メモリアリストの護神

藤崎 茅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メモリアリストの護神

【Nコード】

N5540X

【作者名】

藤崎 茅

【あらすじ】

誰もが抱きゆるるもの、思い出。それが傷つけられたとき、人は思い出に縛られ異能を発現する。

高校に入学した新堂真護の地元では、「連続噛みつき魔事件」という猟奇傷害事件が多発していた。そんななか、真護は吸血鬼と化した謎の女性に襲われていたところを、同じ高校のクラスメイト夜桜舞姫に助けられる。彼女は、思い出を断ち斬る刀を振るい戦う少女だった。

真護は、現在多発している「連続噛みつき魔事件」が、思い出の鎖

に縛られた理想狂クラマケの起こしている事件だという真実を聞かされ、人の思い出をめぐる戦いに巻き込まれることになる。

プロローグ(前書き)

ひとまず、プロローグを投稿させていただきます。

プロローグ

終電直後の駅前広場は、完全なる静けさに満ちていた。

駅ビルを始め、周囲にある店はすべて、一日の業務を終えて眠りについている。

明日、入社してくる新入社員へのセミナー。その準備に追われ、退勤時間を大幅に遅らせてしまった私は、見慣れない深夜帯の地元を歩いて帰宅していた。

タクシーに乗って帰る手もあったが、私の借りているアパートは駅から歩いて10分程度という立地にある。並んでいる間に着いてしまいかもしれないし、高い深夜料金を払ってまでタクシーに乗って帰る必要はないと考え、結局徒歩で帰ることにしたのだ。

しかし、歩きはじめて数分後。すぐにその判断を後悔した。

駅から少しでも離れると、駅前広場ほどの明かりは無く、数メートルおきに設えられている頼りない外灯くらいなものだった。必ず通なねばならない公園のわき道では、ホームレスの段ボールハウスが目飛び込んできてしまい、無意識に歩行速度が上がる。無音の夜道に響く、自分の規則的な足音さえ不気味だ。

薄暗い公園のわき道を抜け、ようやく私の住むアパートがある住宅街に出た。「もう少して家に帰れる」という安心感が芽生え始める。

加速気味だった歩行速度が徐々に緩やかに落ちてきたときだった。目的のアパートは、すでに目と鼻の先にあることはわかっている。だが、私の目に真つ先に飛び込んできたのは、そんな見慣れた日常ではなかった。

私の歩いている道の先。

そこに立っている、不気味な男。

ここは住宅街。人がいることに何の不思議もない。だが、今は深夜1時過ぎ。いくら住宅街とはいえ、こんな真夜中に外で。しかも1人で何をやっているのだろうか？

おかしいことはそれだけではない。暗がりでもハッキリとはわからないものの、遠目にある外灯を頼りに目を凝らしてみても気が付いた。男はマントを纏っているようだった。

真っ黒なマント。その胸元からわずかに覗く白地のシャツ。俯き加減で立ち尽くす人影に、どこかで見た空想上の怪物を連想させる。

私はしばらく、その場で立ち止まって様子を伺う。しかし、男は全く動こうとせず、ただただその場に立ったまま、体をこちら側に向けている。

仕事の疲れはすでにピークに達していたが、あんな不審な人物の側を通って行く勇氣はない。

私は仕方なく、道を迂回して反対側の通用口から帰ることにし、来た道を引き返そうと踵を返す。

住宅街に響く、私の足音。

住宅街に響く、背後からの足音。

「…………え？」

気のせいではない。間違いなく、自分以外の者の足音が聞こえた。私は、思わずその場で足を止め、意識だけを背後に向ける。

考えすぎだ。そうだと願いつつ、意識は背後に向けたまま、私はもう一歩前へと歩を進めた。

しかし、私の願いは、再び背後から聞こえてきた足音によって、あっさりと碎かれる。

「…………ッ……！」

息が詰まるような悲鳴とともに、その場に凍りつく。間違いはない。

あの黒マントは、私に歩を合わせている。

もはや闇夜の恐怖など気にもならない。今はただ、こんな真夜中にたった一人で立ち尽くし、自分のあとを着けてくる不気味な存在に恐怖を感じていた。

硬直するわたしに、さらなる追い討ちがかかる。

背後から容赦なく近づいてくる、短調な足音。立ち止まっている私に構うことなく、距離を詰めてきているのに気がついた。

その事態を全く予想していなかったわけではない。だが、まさか自分の身に襲いかかるとは……。

言いようのない嫌悪感と恐怖心に全身を抱き締められる。

足音が徐々に近づいてくる。

今すぐ逃げ出さなければならぬ。

それなのに、私の足はタガタと震えるだけで、言うことを聞いてくれそうにない。鼓動は高鳴り、呼吸は荒くなる一方だ。

と、ふいに私の首に何かに触れた。

ひんやりとした冷たさ。しかし、どこか人間味の通った不気味な感触。確認せずとも、それが男の手だというのは即座に理解できた。

「ひ……ッ!!」

私は小さな悲鳴をあげ、反射的にその手を振り払う。それを合図にしたかのように、私の足は住宅街を駆け出していた。どこに向かって走っているかなど、もはや私にはわからない。だが、あの不気味な男から逃れる一心で滅茶苦茶に走り回った。

乱れた私の呼吸と、必死の思いで駆ける足音だけが響く。

「 そんなに急いで、どこに行くんですか? 」

突然、耳元から聞こえてくる、乾いた囁き声。

それに続いて、私の首筋に激痛が走った。何か鋭利なものに貫かれたような、耐えがたい激痛。それとともに感じる、男の生温かい吐息。

信じがたいことだが、即座に噛みつかれたのだということを理解した。

「ッ……あああッ！！！」

深夜の住宅街に、私の悲痛な絶叫がこだまする。

「！？……むぐう！」

だが、その絶叫さえも、男の手によつてすぐにふさがれてしまう。首筋から暖かい血が流れ出す、不愉快な感觸。あまりの痛みと恐怖に、止めどなく涙があふれ出してくる。

……だが、ほどなくして私は不思議なことに気がついた。

さつきまで、間違いなく私の痛覺を蹂躪していた、貫くような耐えがたい痛み。

その痛みが、まるで洗い流されるような優しさで消え失せていくのがわかる。

そればかりか、首筋に感じる熱い刺激に、恍惚に似た快感さえ感じていた。

「気分はどうですか？」

耳元で囁かれる、男の声。流れ込むように聞こえてくるその声音が、私の快感をさらに加速させる。

「あなたはまだ、生まれたばかりの赤子同然。でも、大丈夫。あなたの血は、なかなか美しい味がする。ゆっくりでいい。僕と同等の存在になった喜びを、歩くような速度でかみしめてくださいね」

私は、真つ赤に染まった視界で月を仰ぎ、男のそんな囁きに聞き浸っていた。

プロローグ（後書き）

まだ続きがあります。

本当に少しずつですが、徐々に続きを書いていきたいと思えます。

未熟な文章ですが、一生懸命書かせていただきますので、長い目で見ていただけたら幸いです。

第一章 月明かりの姫君 ？

入学式の朝は、これといって大きな変化も無く訪れた。

いつものごとく、6時半頃には起床し、顔を洗う。テレビをつければ、もはや平日に顔を見かけない日は無い、お馴染みのアナウンサーの顔があった。

BGM程度の認識で聞き流しつつ、俺は朝食の準備を進める。

何から何まで、昨日までの短い春休みと代わり映えない朝。違う事といえば、今日から3年間、毎日袖を通すことになる制服が変わったことぐらいだ。

……おっと。この流れでいくと、そろそろ恒例の挨拶が飛んでくるのかな？

「おい！ 起きてるかぁー！！」

俺がそんなことを考えていたタイミングを見計らっていたかのように、朝の静けさを破る呼び声が聞こえてきた。

「真護まもろーッ、新堂真護しんどうまもろーッ！ 起きてるなら、ただちにこのドアを開けなさいよねーッ！！」

朝っぱらから、容赦ない大声で俺の名を呼ぶ声。窓の外を見ると、出勤途中の会社員風の男性が、苦笑を浮かべながら家の玄関前を見ていくのが見える。

いつものことではあるが、流石に名前まで叫ばれるのはいつまで経っても恥ずかしい。

俺は今だに叫び続けている声の主の要求に答えようと、朝食を作る手を止め、玄関に向かおうとした時だった。

「よーし……、ねぼすけには喝が必要だな？ あと3つ数え終わるうちに出てこないなら、このドア、蹴破るからねー！」

「うわっ……、ヤバッ！」

そんな凶行を堂々と予告され、つい思ったことが口について出る。俺は緩やかだった足取りを速め、急いで玄関に向かうが、暴挙への

カウントダウンは容赦なく始まってしまった。

「覚悟しなさい！ ……ひとっ、……ふたっ……」

「わぁーっ！ 待て待て、ストロップ！！」

叫びながら、俺は勢いよくドアを開けた。……が、

「みっつ！！」

「……って、うおおっ！？」

遅かったようだ。玄関扉の向こうで俺を出迎えたのは、矢でも放ったかのような鋭い蹴り。俺はそれを、開け放ったドアに背を預けるようにして飛び退き、ギリギリで避けることができた。

「遅いつ！ わたしのことを1分14秒も待たせるなんて、なかなかいい度胸してるじゃない？」

ドアにへばりついたまま硬直している俺に、そんな楽しんでるようにも聞こえる言葉が飛んできた。

その声の主に目を向けると、俺と同じ高校の女子の制服を着た少女が、胸の前で腕を組み、からかうような微笑みを浮かべているのが目に映る。

平均的な高校生女子の身長。出るべきところも含め全体的に細身だが、それは痩せすぎているわけではなく、実に健康的な印象をうける。程よい明るみを帯び、肩に触れるくらいまで伸びた明るみのあるショートヘアが、挨拶代わりの蹴りを飛ばしてくる活発さを強調していた。

俺は、また蹴りが飛んでこないか警戒しつつ、ゆっくりと態勢を立て直しながら、懇願するように口を開いた。

「渚沙、毎朝言ってるだろ。挨拶代わりに空手の技出すのは勘弁してくれって……」

「別にいいでしょ、今更。もう3年近くこのやり取り続けてるんだから。真護だつて、簡単に避けてるし」

言いながら渚沙は、不敵な笑みを浮かべつつ、腕組みを解いた。

俺の幼馴染、千晶渚沙の言つとおり、これも日常。彼女からランダムに繰り出される空手技から始まる、ハイテンションな朝。

嫌いじゃないんだけど、心臓に悪いんだよなあ。

「それより、もう学校に行く支度出来てるの？」

俺がそんなことを考えているとはつゆ知らず、渚沙はマイペースで話を進める。

「ままだよ。丁度、朝食作ってる時に渚沙が来たんだから」

「ああ、そうだったの？ だったら待つててあげるから、さっさと食べちゃって。入学式早々遅刻して、悪い印象与えたくないでしょ」

「あのカウントダウンさえ無ければ、今ごろのんびりとした朝食をだな……」

「なんか言った？」

「いえ、なんでも……」

俺は軽い抗議を試みるものの、それは渚沙の一言で制止されてしまった。

そんな会話をひとしきり終え、リビングに戻る。

俺が作りかけの朝食に、再度手を加え始めている中、渚沙はソファに座り、テレビを見ている。

ただ、平日の朝に放送されているテレビ番組といえば、ニュースくらいなもの。見ているというより、？眺めている？といった表現の方が合ってるかもしれないと思った。

朝食を作り終え、テーブルに運ぶ。最後に自分と、ついでに渚沙の分のコーヒーを注ぎ終えた時だった。

「あ、また出たんだ」

不意に渚沙が呟く。

「どうしたんだ？」

俺は、渚沙にコーヒーを差し出しながら尋ねる。

「”連続噛み付き魔事件”。ほら、最近この辺りで起きてるやつ」
渚沙はテレビで流れているニュース映像から目を離すことなく、

俺の問いに答える。

「ああ、あの物騒な事件か。最近多いよな」

「うん。しかもほら、こここの住宅街。ここから10分もかからない

ところじゃん」

渚沙の示すテレビ画面には、すぐ近所にある住宅街が映し出されている。普段はあまり通らない地域ではあるが、見知った土地で物騒なことが起きたというのは、あまりいい気分じゃない。

「夜道で急に襲いかかってくるんでしょ？ 噛み付くだけで、あとは何もしない。なんか、逆に気持ち悪いよね」

事件のことを話しながら、渚沙は率直な感想を漏らす。

”連続噛み付き魔事件”は、ここ数日、この辺りを騒がせている連続暴行事件。確認されているだけでも、すでに10人近くの被害者が出ている。

犯人は首筋のあたりに噛み付き、何か金品を奪うわけでもなくその場を立ち去るといふ。

現場には何一つとして証拠は残されておらず、犯行の目的も皆目検討のつかない事件だが、ひとつだけ妙なことがある。

それは、襲われるのは男女無差別なのだが、決定的な違いがあるということ。

襲われた男性は、噛まれた後の記憶を鮮明に覚えているのに対し、女性はその後の記憶を全く覚えていないのだ。

それだけではない。女性の被害者に限り、噛まれた翌日から例外なく夢遊病のような症状に悩まされている。目が覚めると、見知らぬ裏通りや建物の中で眠っていた、といった具合だ。

精神科を受診した被害者もいるようだが、ほとんど改善の余地は見られないという。

「単なる変質者のやったこととしては、記憶が曖昧だったり、おかしな事件だよな」

「ホント、不気味な上に迷惑だし。真護も気をつけなよ？夜道で襲われないように」

「いやいや、そりゃ俺のセリフだったの」

渚沙の言葉に苦笑いを浮かべながら、俺はそう返す。

「わたし？ わたしは大丈夫でしょ。そんな変態、襲ってきたら返り討ちにしてやるわよ」

ソファアの背もたれで頼杖をつき、自信満々の笑みを浮かべながらそんなことを言つてのける渚沙。

その自信は、まだ経験の浅い中学生のときに出場した空手の大会で、体格差のある大人に圧勝したことから湧いてくるのだろう。

「……っていうか、なに？ 真護、わたしのこと心配してくれてるんだ」

突然、そんな当たり前の質問を投げかけてくる渚沙。

「そりゃあ、心配するに決まってるんだろ」

「ふーん……。そうなんだ。心配、してくれるんだ……」

そう言つて、渚沙は再びテレビに視線を戻した。恐らく、「弱い女の子」という見方をされたのが気に食わなかったのだろう。

渚沙は時々、俺のこういつた発言に対してそっけない態度を見せることがある。以前、一度謝つてみたことがあるのだが、「この唐変木！」と怒られた。なので、渚沙がこうなったら機嫌が治るのを待つしかないというのが現状だ。

なぜ自分が怒られるのか訪ねることもできるのだろうが、そんなことをすれば今度こそ命がない気がするので、遠慮している。

ただ、どれだけ渚沙に嫌な顔をされたところで、俺はきつと心配になつてしまうと思う。

なぜなら、今の渚沙は“強がつているのだ”ということを知っているからだ。

5年前あんなことさえなければ、きつと渚沙は、今でも強がつたりせずいられたのだろうか。

「そんなことより、真護」

その渚沙に声をかけられ、俺は我に返る。

「……朝食、食べないの？」

「……あ」

そこまで言われて俺は、ようやく自分で調理した朝食の存在を思い出した。

結局、入学式の朝は、いつもの日常より少しだけ慌ただしくスタートすることになってしまったのだった。

第一章 月明かりの姫君 ？

俺と渚沙は、“入学式”と書かれた立て看板のある校門をくぐり抜けたところだった。

夕凧学園高等学校。俺たちの住む町にある高校である。

よく書店などに売られている“全国高等学校ランキング”のような類の本にも、上位ではないものの掲載されることのある、いわゆる中堅クラスの学校だ。

学園の設備はそれなりに揃っており、超有名進学校と比べても申し分ない程度の環境なら整っている。そういうところも、この学園に進学を希望する学生が多い理由の一つなのだろう。

俺たちは、家族や友人同士で談笑したり、ふざけあったりしている、新入生であろう学生たちを眺めつつ、まっすぐに体育館に向かおうとしていた時である。

「うおーい！ マモー！！ ナギー！！」

突然、そんな慣れ親しんだあだ名で呼びかけてくる声。

声の主がわかりきっている俺と渚沙は、足を止めて振り返る。目に飛び込んできたのは4、5人の男女のグループの中から、大きく手を振り全速力で走り抜けてくる、入学式とかのイベントに必ず1人はいるハイテンションな男だった。

その男は俺たちの前まで来ると、わざとらしい動作で急ブレーキをかけて止まった。

「……っと、待たせたなあ！！」

そして、おそらく自分にとって一番のキメ顔でそんな挨拶を口にする。

「別に待ってたわけじゃないけどな」

俺は慣れた調子で、彼の挨拶を受け流した。

「んだよそれー、テンションひきいなあ！　オレはお前をそんな子に育てた覚えはないぞっ！！」

いちいち大げさなジェスチャーをとりながら叫ぶ彼。もちろん、育てられた覚えはない。

「お前は相変わらずハイテンションだな、竜成^{りゅうせい}」

「ホントよ。入学式で変な行動起こさないでよね？」

俺と渚沙は、口々にそんな言葉を投げかけた。

まきのりゅうせい 牧野竜成。中学の時に知り合った、俺と渚沙の友人である。

身長は180センチよりもやや手前で、俺よりも10センチ程長身。がっしりとした体に着た制服のシャツは着崩しており、常にヘラヘラとした締まりのない表情を浮かべている。

茶髪に染めたショートヘアの襟足部分だけが妙に長いため、ややチャラくも見える。

正直言って、初めて会ったときの第一印象は……ハイテンションでうるさそう、だった。

きつとあまりいい友達にはならないと思っていたのだが、本質的にはかなりいい奴だということが少しずつわかってきたのだ。軽い所はあるものの、ラグビー部のエースという硬派な部分も持ち合わせており、今や俺たち友人グループの一員である。

「大丈夫だっつーの！　ちったあオレを信じろって。入学式早々、先公に目つけられるようなへまはやらかさねえよ」

竜成はそう言いながら、両手をひらひらと振って余裕の表情を見せてくる。

「……っつーかさあ」

「ん？」

何やら、突然竜成がニヤニヤとした目つきで、俺と渚沙を交互に見てくる。そして、やれやれといった様子で腕を組み、

「これから何が起こるかかわからねえ高校生活初日にカップル登校とはねえ。んー、おアツい！！」

「「んなっ！！？」」

竜成の言葉に、俺と渚沙はほぼ同時に息の詰まったような声を上げる。

「ば……馬鹿野郎！ 変なこと言うなよ竜成！」

「そ、そうよ！ なんでわたしが真護と……。け、けけけ……けっ、こん……しなきゃならないのよ！」

顔を真っ赤にして、そう抗議する渚沙を見て、竜成はさらに続けた。

「あれれ？ オレは“カップル登校”つつただけで、“夫婦で登校”なんて言ってねえぜ？ おかしいなあ？？」

「ち、ちが……！ 別に、そういうわけじゃ……」

自分の失態に気付き、渚沙はどんだん頬を紅潮させてゆく。

そりゃそうだ。いくらなんでも、結婚って……。

「ナギちゃんはひよつとして？ マモとの結婚生活を想像しちゃうたりしているのかなあ？ 家は一戸建てでええ、子供は女の子と男の子が1人ずつ欲しくってええ、家族みんなでお風呂に入るのぉ！ ってか！？ いやあねえ、ナギちゃんったら……こんな朝早くからっ！」

「お、おい竜成やめろ！ このままじゃ、お前の命が危ない！」

ハイテンションで妄想を吐き出している竜成に向けて、俺は必死の警告をする。

「は？ 俺の命？」

そこまで言い終えて、ようやく渚沙に目を向けた。そして、次の瞬間には顔を蒼白にした。

「……へえ……。……あなた、そんなに死にたいんだあ？」

渚沙の全身からあふれ出る、負のオーラ。両手にはすでに、固い拳が用意されており、それがバキバキと音を立てている。

それを見た竜成が、ようやく自らの命が断崖絶壁に立たされていることを悟る。

「お……、落ち着け、渚沙……！ オレが悪かったって！ “カップル登校”くらいでとどめときゃよかつたんだよな！？ あは……

あはははは……！！！！」

必死に弁解の言葉を述べる竜成。だが、時すでに遅し……。

「カップル登校” つつた時点で……、あんたの処刑は確定してんのよ！！」

「ひうぶい……！！！？」

渚沙の稲妻のような拳を受けた竜成は、そんな不思議なうめき声を上げ、体を反時計回りにねじらせながら、先ほどまで談笑していたであろう友人グループのところまで吹っ飛んでいった。

「フン、真護！ 行くよ！！」

渚沙はそう言って踵を返し、新入生や在校生が恐れおののく視線を浴びつつ、入学式が行われる体育館へ大股で歩き始めた。

「お……おお……」

俺は、奇妙なオブジェのようになった友人を遠目に見送りながら、そう返事をして渚沙のあとに続く。

じゃあな、竜成。お前のことは忘れない……！！

第一章 月明かりの姫君 ？

入学式は滞りなく済み、俺と渚沙。そして、“なぜか”鼻に巨大な絆創膏が貼られた竜成とともに、クラス表の前にいた。朝会ったときの竜成は、あんなもの貼ってなかった。かわいそうに、きつと“何か”あったんだろう。そして、それはとてつもなく痛いことだったんだろう……。

「おつ、オレとマモ同じクラスじゃねえか」

そんなことを考えていると、竜成が嬉しそうに言いながらクラス表を指した。

「あ、マジで？」

俺は竜成の指したところに目を向ける。

確かに、1年3組の欄に俺と竜成の名前があった。

「騒がしい1年になりそうだな」

俺が笑いながらそう言うと、竜成は肩を組むようにして寄りかかってきて、がっしりとした重みが体にのしかかる。

「いいじゃねえかよ。知り合いが1人もいねえスタートを切るよりマシだろ？ ま、1年間よろしく頼むぜ」

そして、そんな挨拶をかわしてきたので、俺も「ああ、よろしく」と返した。

「あれ？ そういやあ、渚沙の名前がねえじゃねえか」

「あ、本当だ」

竜成に言われて再びクラス表に目を向けると、確かにうちのクラスに渚沙の名前はなかった。

「わたしは4組よ」

言われて俺は、渚沙の方を見る。

「クラス、別れちゃったわね」

渚沙は、少し寂しそうな微笑みを浮かべながら、俺たちにそう言った。

「かわいそうに……。引き裂かれた夫婦、悲恋の恋……。くう、泣けてくるぜ……！」

「あんだ、またブン殴りたいの？」

涙を拭うような小芝居をする竜成に対し、渚沙はそう警告する。今度ばかりは、竜成も素直に謝った。

「ま、別に学校そのものが変わっちゃうわけじゃないんだし。休み時間に会おうと思えばいつでも会えるでしょ？ 別に寂しくなんかないわ。それに、いつもあなたたちとくっついてるより、いっぱい友達ができそう楽しんでね」

そう言っつて、渚沙は微笑みを浮かべる。

同じクラスになれなかったのは残念だが、渚沙の言うとおり、新しい友達づくりのチャンスでもある。

俺は渚沙の言葉に頷く。

クラスも確認できたところで、俺は教室に向かおうと竜成に声をかけようとした時だった。

「…………げっ、マジかよ」

突然、クラス表を眺めていた竜成の顔色が変わる。

何か不都合なことが起きた。そんな顔だ。

「どうした、竜成？」

「どうしたもこうしたも、アイツまで同じクラスかよ。まったく、冗談だろ」

言いながら、がっくり肩を落とす竜成。

俺は竜成が見ていたあたりに目を向けると、そこにはひと際目立つ名前が記載されていた。

「夜桜……舞姫……？」

目に飛び込んできたあまりにも美しい字面に、俺は思わず口声に出して読んでしまった。

だが、正直それが誰なのかはわからず、

「誰？」

俺は率直な質問を投げかけてしまう。

「なあっ!!!? おまつ……、夜桜舞姫を知らねえのか!?!」

俺の問いかけに、竜成が宇宙人でも見るかのような目をして叫んだ。

「夜桜舞姫。成績優秀。スポーツ万能。おまけに容姿端麗っつー、まあいわゆる、男の注目を集めねえわけがねえ女だ。実際中学時代には、他校の連中も含めて100人以上に告られたっつー伝説までありやがる。もちろん、1人残らず玉砕してるがな」

「? それの何が嫌なんだ？」

俺は竜成に疑問を投げかける。

話を聞く限り、舞姫という少女は完璧といっても過言ではない存在であることが想像できる。竜成なら、同じクラスで1年間を過ごせるというだけで、喜びそつに思えたが……。

俺の問いに答えようと、竜成がうんざりした様子で口を開く。

「そりゃあ、オレだって最初に夜桜舞姫のことを聞いたときは狙い目にしようとか考えてたぜ。……けどなあ、本当のところを知っちゃまった今じゃ、素直に喜べねえよ」

「本当のところ？」

竜成の口から出た言葉を繰り返す。

すると、竜成は何かに気付き、校門のほうを指しながら、

「ホラ、噂をすればなんとやらっつてな。アイツがその、夜桜舞姫だ」
言われて俺は、指された方に目を向けると、今頃になって校門を通り抜けてくる女子生徒が目に入った。入学式もとつくに終わり、自分のクラスに向かう者さえいるなかを、悪びれる様子をまったく見せずにこちらへと歩んでくる。

切れ長の双眸をより一層細め、周囲の人間を近付けまいとした様子だ。

ただ、そんなことなどまったく気にならなくなってしまっただけ、その少女は……、

圧倒的な美しさを持っていた。

長身とは言えないものの、すらりとした身の丈に、背中の中あたりまで伸ばした風に舞う艶やかな黒髪。

ただの制服が、まるでドレスにでも錯覚してしまうかのような引き締まった体つきに、まったく無駄のない歩行運動。

そして何より目を引くのが、人形のように整いつつも、たしか人間味があふれ出している美貌。

そのすべてが、圧倒的に彼女の存在感を放っていた。

彼女は、ただ歩いてクラス表を見に来るだけなのだろう。それなのに、新入生・在校生はもちろん、その保真護者や教師までもが、彼女に目を奪われているのが容易く確認できた。

そして、それは俺も同じことだった。

気がつくと彼女は、俺のすぐそばにまで迫ってきているのに気付いた。身長差はあまりなく、俺と同じくらいなせいもあり、まっすぐ俺の目を見据えられている気さえしてしまう。何よりその美貌は、近くで見るとより一層の端麗さを放っていた。

俺は思わず、後ずさるようなかたちでその場を退き、やってきた夜桜舞姫という少女に場所を譲った。

一瞬だけこちらを一瞥してきたものの、すぐにクラス表に視線を移してしまう。

「1年3組、ね」

しばらく自分の名前を探した後、興味がなさそうにそう呟いた。その声は、美しい容姿には意外なほど、何か力強い意志のようなものがこもっているような気がした。

夜桜舞姫は、自分の目的だけ済ませると、さっさとクラス表に背を向けて校舎の方へと歩き出した。

俺を含め、何人もの学生が彼女の背中を見送ってしまっていた。

「感想は？」

「へっ？」

突然、竜成に話しかけられ、俺は間抜けな声をあげてしまった。

「だあから、夜桜舞姫だよ。どうだった？」

「いや、どうって言われても……。まだ口をきいたわけでもないし、何とも言えないよ。……。ただ、ちよつと威圧感があったかなあ」

俺がそう答えると、ずつと眺めていた渚沙が入ってくる。

「威圧感とかいうより、あれ感じ悪くない？ 真護と目が合ってたみたいだけど、興味なさそうにしちゃってさ」

「いや、無理もないだろ。今日会ったばかりの、しかも男に興味を持ってだなんて」

「そりゃ、そうだけど……」

渚沙は納得いかない様子で肯定した。

気のせいだろうか、渚沙は自分が馬鹿にされた時のような拗ねかたをしている気がするけど。

「そのこの新生ちゃん！ ちよつといいかなあ！！」

と、校舎入口の方から突然声が聞こえた。

声のした方を見て目に映ったのは、髪の毛を赤やら金やら、派手に染め上げた男4人組みだった。

「おれたちさあ、とあるブカツの主催者なんだけとお、よかつたら話聞いていかない？」

「5分……。いや、2分で終わらせるからさ！ ね？」

「ぜえ〜つたいにソンはさせないってえ〜。だからさあ〜、あそこにあるブシツにちよつち顔出してこようよ。ね？」

そんな下心丸出しの誘い文句を口々に並べながら、不快な笑みを浮かべる連中。言葉だけでは飽き足らず、馴れ馴れしく肩に手を置く者さえいた。

「アイツら……。！！」

『部活動に誘ってただけだ』なんて言い訳されては終わりだけど、そんなことはどうでもいい。俺は何の考えもなしに、夜桜舞姫を慰みものにしてしようとしているであろう連中の元へ向かおうとしていた。

「お、おい。ちょっと待ってって真護！」

しかし、俺の腕を竜成が掴み、それを止めてしまう。

「何すんだ、放せよ竜成！ クラスメイトがヤバいんだぞ」

俺はまだまともに話したこともない、暫定クラスメイトを守ることで頭がいっぱいになり、竜成の腕をはがそうとする。だが、竜成もラグビーのスポーツ推薦でこの高校に入ったスポーツマン。そう簡単にひき剥がせはしない。

「いいから落ち着けて。お前が困ってる奴を放つとけないのは知ってるけど、夜桜舞姫なら大丈夫だったの」

俺の腕を掴みながら、竜成は落ち着き払った様子で俺にそう告げる。

「は？ それどういう意味だよ？」

竜成の言ってる言葉の意味がよく理解できず、そう聞き返す。

「まあ、見ててみるって。おもしれえもんが見られるぜ」

「おもしろいって……、そんなわけが……」

「触んじゃねえよ。ぶっ飛ばすぞ」

俺が批判の言葉を発しようとした直後だった。

問題の起きている辺りから聞こえてきたのは、明らかに男のものとは違う……、ただ、男のものにしか聞こえない台詞だった。

俺は再び、先ほどの連中が夜桜舞姫に声をかけていた辺りに目を向ける。すると、さっきまで驚くほど気色悪い笑みを浮かべていた連中が、呆気にとられた様子で立ち尽くしていた。

あの様子から察するに、間違いはない。さっきの上品かつ物騒な台詞は、“夜桜舞姫”という美しい名前と容姿を兼ね備えた少女のものであった。

それに飽きることなく、夜桜舞姫は言葉を発し続ける。

「あのなあ、お前らがどこで、どの女を食おうが知ったこっちゃねえよ。けどなあ、私を巻き込むんじゃねえ。私はそんなのに付き合

つてるほど暇じゃないし、軽くもない。わかつたら、さつさこの汚い手エどける。肩が腐るだろうが」

まるで準備でもしていたかの如き口調で、自らを取り囲んでいる男たちにそんな啖呵を切る。

竜成の言いたいことがなんとなくわかった気がする。

彼女はきつと……“あつち方面”の人なのだろう。

ただ、俺はすでに別の意味での不安に駆られていた。

夜桜舞姫は、確かに悠然とした態度でふるまっている。だが、当然相手もそれで黙っていられるわけもなく、見る見る額に青筋が立ってゆくのが見て取れたのだ。

ハッキリ言つて、いつ爆発してもおかしくないような状態。まさに、一触即発である。

そして、その不安は即座に確信へと変わった。

「……この女アツ！ 優しく声かけてやってりゃあ、いい気になりやがってツー！」

男の一人が、夜桜舞姫に向かって拳を振り上げた。

ケンカ慣れしているであろうその拳は、容赦ない勢いで彼女に襲いかかる。俺はその様子を見ていられなくなり、思わず制止の叫びを発しようとした。

だが、その必要はまったくなかった。

「うおっ！！！？」

声を上げたのは、殴りかかった男だった。それどころか、男はうつ伏せの体勢で宙に浮きあがっている。しかし、すぐに重力に耐え切れなくなり、腹からまっすぐ地面へと落ちていった。

「が……ッ！？」

突然起きたことを即座に理解できず、ただ腹部から伝わってくる圧痛に、小さな悲鳴を上げていた。

見ると彼女は、殴りかかってきた男の右サイドへと体を移動させており、そのまま殴りかかってきた勢いを使って足払いをしたようだった。

あまりにも華麗で、まったく無駄のない動き。ただ見ていただけの俺が追い切れなかったそれを、頭に血の上りきった連中に見極めることなどできるはずもなく、成す術もないままたたき落とされたのだった。

「こ……このアマ！ 調子に乗るんじゃないぞ！！？」

仲間があっけなくやられたのを見て、残りの男3人が一斉に彼女に襲いかかる。

だが、それでも彼女の動きは乱れなかった。

手に持っていたスクールバッグを放り捨てたかと思うと、まず真正面から向かってきた男の頭に右手をかけ、跳び箱の要領で跳躍しつつ、真上からの重力を送り込むことで地面にたたきつける。

そのまま男たちの背後に着地したかと思うと、すぐに体を反回転させ、左側にいた男の背中に強烈な肘鉄を打ち込んだ。吹き飛ばされた男はそのまま地面に倒れこみ、腕を背中に回しながらもがき始める。

「な……、う、ウソだろ……？ 3人もいたのに……もう」

残された男一人が、あつというまにやられて地面に伏している仲間を目にし、一気に戦意喪失した様子を見せる。

だが、そんなことなどまったく気にせず、夜桜舞姫はたった一人となった男との距離を徐々に詰めていく。

「あ……や、やめろ！ わかった、俺たちが悪かったから！ 見逃してくれ……！」

だが、彼女は歩調を緩めることなく、許しを乞う男にじりじりと詰め寄っていく。

元より切れ長だった双眸が、今や目の前の相手を殺しかねないほどに、殺意を帯びたものになっている。そんな目で睨まれている男の気持ち、真護は容易に想像できた。

「も……もういいだろっ……！」

「？」

気がつく、俺は夜桜舞姫に向かって叫んでいた。

竜成がやめるよう促しているのも聞こえている。騒ぎを見物していた野次馬の視線も、一斉に俺の方へと向けられているが、俺は言葉が発することをやめなかった。

「ホ……ホラ。そいつ、謝ってるし。もう許してやったらどうだ？ アンタだって、もう二度と手は出さないだろ？」

俺は彼女に続き、懇願していた男にもそう尋ねる。

声にこそ出せていないものの、男は何度も頷いては、俺の言葉を認めた様子を彼女に見せる。

「……チッ」

すると、彼女も睨みを効かせていた双眸を緩める。そして、

「……同じこと繰り返すのと、学習すんの。どっち選んじゃあいいかくらいわかるよなあ？」

そんな捨て台詞を吐いた後、再度俺の方を一瞥し、校舎内へと歩いていった。

「なんか……すごかったね」

黙ってみていた渚沙が、不意にそんな言葉を漏らした。

「真護、大丈夫なの？ 同じクラスでしょ？」

「あ、ああ。たぶん大丈夫だろ。止めたら止めたで、あれ以上のことはしなかったし。確かに乱暴なところはありそうだけど、話せばわかるやつ……だと、思う……？」

俺は自信なさげに答えた。

「しかし、マモよお。お前、いい加減にそのお人好しっぷりはどうかと思うぜ？」

俺の腕をがっしりと掴んでいた竜成が、ようやく手を解いてそんなことを言った。

「本当だよ。どう見たって、悪いのはあの男の人たちだもん。真護が止める必要なんかなかったじゃない」

渚沙も、竜成の意見に賛同してくる。

「ああ、ごめん。気をつけるよ」

俺は人差し指で頬を掻きながらそんなことを言ったものの、本気

でそうは思っていない。

確かに、自分でも驚くほどお人好しだとは思う。さっきだって、普通だったら放っておけば何のかわりも持たずに済ませていい話だった。

けど、俺はどうしてもそうはできない。

少しでも助けべきなら、それが問題の種をまいた張本人だったとしても、なんとかして守ろうと突っ走ってしまう。

治したいとは思っていても、なぜかどうにもならない。

ただ、今回は自分でもおかしいことだと思う。

夜桜舞姫をどうにかしようと思っていたあの男たちに対して、俺は『助きたい』なんていう感情は、間違いなく持っていないかった。なのに俺は気がつく、彼女を止めるために叫んでいた。

自らの謎めいた感情に悶々としながらも、俺たちは教室に向かうことにした。

第一章 月明かりの姫君 ？

登校初日の妙な気まずさが漂う教室で、高校生活最初のホームルームが行われていた。

担当教員の挨拶。時間割表の配布。事務的事項の伝達などを一通り終えたところで、顔合わせも兼ねた自己紹介が始まる。

第一印象を考えてか、皆一様に言葉を選んでおり、たどたどしい口調である。

そんななか、ただ一人、竜成だけは堂々とした自己紹介をし、初顔合わせのクラスメイトを一気に自分のペースへと引き込んだ。

それによって、クラスの空気は一気に緩み、隣の席の者に話かける者さえ現れる。

何度かこういう光景は見ているが、やはり竜成は天性のムードメーカーなのだ、改めて確信する。このクラスから、出会ったばかりの気まずさが消えてなくなるのも、そう遠い日ではないのだろう。全員の自己紹介が済んだところで、今日の予定は終了。クラスメイトに声をかける者もいれば、そそくさと下校する者もいる。

ふと、俺はある席に目を向けた。

窓際、最後列。ホームルームの最中、一瞬たりとも埋まることなく、空席のままだった場所。

夜桜舞姫の席だ。

あの後、彼女の姿は一度も見えていない。

絡んできた連中を倒して校舎内に姿を消したきり、どこへ行ったのかもわからない。机に誰かが触ったり、椅子に座ったりした様子もない。おそらく、顔を出してすらいないのだろう。

「……………」

なぜだか、俺は朝の出来事から、妙に夜桜舞姫というあのクラスメイトのことが気にかかっていた。もちろん、あれほどの騒ぎだったのだから、彼女の存在が印象深く残っている者は多いだろう。

しかし、俺の感じているのは、その程度の感覚ではなかった。
わざわざケンカの仲裁に入ったり。今だって、一度もクラスに顔
を出していないことを気にしたり。

まだ会話もしたことがないどころか、相手は自分の名前すら知ら
ない。だというのに、俺は自分でもどうかしてると思うくらいに、
彼女のことを気にかけている。

とてつもなく妙な感覚。言うなれば……“ そうしなければならな
い義務感” のようなものすら感じているような気がしていた。

「夜桜舞姫、か……」

「白昼堂々、浮気か？」

「！」

誤解を招きかねないような呼びかけに、俺は思わず飛びのいてか
ら振り返る。

声の主は当然、竜成だ。

「き、急に話しかけるなよな！ びっくりしただろ。……っつーか、
浮気ってなんだよ浮気って」

「いや？ ただ、マモの口からナギ以外の女の名前が聞こえたから、
ちよつと心配になっちまってよ」

言いながら、竜成は意味深な笑みを浮かべている。

少なくとも、友人を心配するときの表情ではないことは確かだ。

「お前なあ……。何度も言ってるけど、俺と渚沙はそういうのじゃ
ないんだって。ただの幼馴染。それに、渚沙にはずっと片思いして
る男がいるらしいぞ」

俺はそう言って、竜成の勘違いを正そうとする。

そう。渚沙には、小学生以来の想い人がいるのだそうだ。だが本
人曰く、その男はかなり鈍感らしく、渚沙の想いには全くと言って
いいほど気が付いていないという。

幼馴染の俺が言うのもなんだが、渚沙はかなり可愛い方だと思う。
中学の時も、数名の男子から告白されていたし、モテる方でもあ

るのだろう。

もしその男が、本当に渚沙の気持ちに気が付いていないのだとしたら、ハッキリ言つて、その男は本当に……、

「本当に、もったいねーことしてるよなあ、そのヤローはよ」

「え？」

言葉遣いには差があるものの、俺が考えていたのと同じことを竜成が口にしたせいで、素っ頓狂な声をあげてしまった。

「いや、別に。ただ、そのヤローも、この調子じゃあジジイになつても気付かねーかもな……」

「何だよ竜成、『この調子』つて。まるで渚沙の好きな男を知つてるみたいない方だな」

「……ハア。ダメだこりゃあ……」

「え？ 何がダメなんだ？」

俺が疑問を抱いているのをよそに、竜成は「なんでもねーよ」と言つて、ひらひらと手を振つた。

呆れたような顔に見えるのは気のせいだろうか。

「まあ、それはそれとしてだ。マモ、悪いことは言わねえ。夜桜舞姫はやめといた方がいいと思うぜ」

渚沙の話が終わつたかと思うと、今度は夜桜舞姫の名前が出てきた。

「あのな、確かにあの子の名前をつぶやきはしたけど、そういう意味じゃないんだつて。……ただ、なんか気にかかつちゃつてさ」

また妙な勘違いをされては困ると思ひ、俺は即座に言葉を返した。だが、なぜか渚沙の話をしていたときのように、スムーズな言葉が出てこない自分がいることに気付く。

気にかかつていたのは事実だが、竜成の考えているような感情が芽生えていないのもまた事実のはずだというのに。

「ふーん。ま、どちらにしろ、あんま関わらねー方がいいと思うぜ。アイツには、色々と妙な噂もあるしな」

「妙な噂？」

「なんでも、真夜中に住宅街だの公園だの、そこらじゅうをうろついているのを見たとか。オレの知り合いには、夜遊びが好きな連中も多いでね。そういう連中から聞いた噂だよ」

俺は、竜成の淡々とした説明を聞いていた。

夜桜舞姫は、俺と同じ高校1年生。当然、夜遊びが認められるような年齢ではない。もし竜成が言っている、“噂”というのが本当だとしたら、確かに妙な話ではある。

「一部じゃあ、今起きてる“連続噛み付き魔事件”に関わりがあるんじゃないかとすら言われてるそうだけ。さすがにそれは言いすぎだとも思うんだが、本人がああ様子じゃあ、疑われたって仕方ねーとも思うがな」

“連続噛み付き魔事件”。まさかクラスメイトの話題でその話が出てくるとは思ってもみなかった。

だが、夜桜舞姫という少女の身のこなしには、確かに見惚れてしまっほどのしなやかさがあった。

一方、事件の犯人も、現場には何一つとして証拠を残さない完璧主義的な人物像が浮かび上がっている。

謎が多い少女に、謎だらけの事件。クラスメイトを疑うようなことはしたくないが、関連付けるなという方が無理な話なのかもしれない。

「おーい、真護ー!」

空席のままさびしげに佇んでいる、夜桜舞姫の席を眺めながらそんなことを考えていると、廊下から聞きなれた声が飛んできた。

渚沙である。

「おや？ お迎えが来たみたいだぜ、旦那さん」

さっきまで物騒な噂話を口にしていた竜成が、俺の背中を叩き、行くように促してくる。

「だから、そういうのじゃないって」

「照れるんじゃないよー!」

俺の抗議も虚しく、竜成は腹立たしい微笑みで俺の背中を押した。

だが、俺も言われっぱなしで終わりたくはないと思い、

「……竜成」

「ん？」

「祝福してくれてサンキューな。さっきのお言葉は、しっかりと渚沙に伝えとくぜ」

「!!!？」

青ざめる竜成を背に、俺は廊下で待つ渚沙の元へと向かった。

もちろん、本当に告げ口したりはしない。だが明日になって、竜成が何も知らない渚沙に向かってジャンピング土下座をするのを想像するのは、ちょっと面白かったりもした。

第一章 月明かりの姫君 ？

夕食を食べ終え、俺はリビングのソファでくつろいでいた。

読んでいたコミック誌から目を離し、時計に目をやると、時刻は11時半を回っていた。

真夜中だということ体を体が自覚してしまったせいか、先ほどまで全く感じていなかった眠気が急激に襲ってくる。

「……そろそろ寝るか」

俺は大きなあくびをしながら、リビングの電気を消し、自室へと向かう。

ベッドと勉強机。俺の背丈より少し低い本棚という殺風景な部屋に入り、ベッドに潜り込もうと照明のスイッチに手をかけた途端、俺は大事なことに気がついた。

「やばっ、参考書……!!」

俺の学校は、授業に対する意欲や態度よりも、定期試験の成績が重要視されている。どれだけたくさんの発言をしようが宿題をそつなくこなそうが、定期試験で赤点を取れば、長期休暇中にやらなければならぬ大量の課題が容赦なく課せられる仕組みになっていると、今日のホームルームで聞かされた。その対策のために、学校指定の参考書が必要不可欠なのだそうだ。

学校帰りに必ず購入しようと思っていたが、渚沙の買い物に付き合っていたこともあり、うっかり忘れてしまっていたことに気づいたのである。

俺は、「学校指定の参考書だが、学生の自主性を試すために、参考書だけは各自別購入とする」とか言っていた教員のことを若干恨みつつ、携帯電話の時計を見ると、現在の時刻は23時50分。

「間に合うか？」

そう呟くと、俺は部屋の明かりを消し、玄関へと向かう。

俺の家から歩いて15分ほどのところに、大きくはないものそれなりに品ぞろえが整っている書店がある。

そこは、いつも夜の0時頃まで開いていてくれるため、急に読みたくなつた本を買えると、この辺りでは重宝されているのだ。

俺はその店に向かおうと、靴を引つ掛けて夜道を走り始めた。

日付が変わる直前の住宅街は、異様な静けさに満ちていた。静寂に包まれた闇夜に、俺の足音だけが響く。それが自分を追いかけているような錯覚を覚えたが、かまわず駆け続ける。

こんな様子を渚沙にでも見られたら、「明日の分だけは図書館で借りてやればいいのに」とか言われるだろう。だが、俺はやるべきことはできるだけ早く済ませたい性分なのだ。

10分ほど夜道を走り、息も絶え絶えになりながら、ギリギリで書店に滑り込む。

閉店作業を始めている店員の急かすような視線を浴びながら、俺は教本のコーナーへと進んだ。

が、いくら探しても、そこには学校指定の参考書は売られてはいなかった。

真夜中の住宅街を駆け抜けてきた努力が水の泡と化した瞬間だった。

「……勘弁してくれよ」

そんな言葉が口を突き、思わず膝に手をついてうなだれる。

ふと店の入り口に目を向けると、店長であるうお年を召した男性が、腕組みをしてドアに寄りかかりながらこちらを見つめている。どうやら、早くしろということらしい。

諦めきれない気持ちはあったが、店に迷惑をかけるわけにはいかない。

俺は走りつかれた足を無理やり動かし、書店を出た……と同時に、拒絶するかのように店のシャッターが下ろされた。

「ついてないなあ」

そんな愚痴をこぼし、仕方なく帰ろうと来た道を歩き始めた時だった。

「？」

店を出て、すぐ傍にある外灯。その足元で、何かがうごめいているのに気がついた。

少し不気味に思いつつも、それに近づいてみる。

すると、それはOL風の女性だった。

街頭に手を着く体勢で、照らされた地面にうずくまっている。息が乱れているのか、肩を上下させ、とてつもなく苦しんでいるようにも見えた。

病気だろうか？ 俺はそんな状態の女性を放っておくことができず、つい声をかけてしまう。

「あ、あの？」

「……！！？」

突然声をかけてしまったせいか、女性は小さな悲鳴を上げる。怯えた様子で顔を上げ、こちらを見ている。

「あ、すみません。その、苦しんでるように見えたので。大丈夫、ですか？」

「あ……、いえ。大丈夫です。……すみません」
そう答えると、女性は外灯につかまりながらゆっくりと立ち始める。

だが、手足は震えているし、顔色も悪い。額には脂汗のようなものまで浮かべている。申し訳ないが、とても大丈夫そうには見えない。

「あ、気をつけて下さい。手伝いますよ」

俺は手を貸そうと、支えるように女性の肩に触れた。

だがその途端、またしても女性は小さな悲鳴を上あげ、俺の手を振りほどいた。俺もわずかながら、反射的に後ろに飛び退いてしま

う。
そんな俺の様子に気づいたのか、女性はハツとした様子で、

「ご、ごめんなさい……。でも、本当に……大丈夫、です……から」
消え入りそうな声でそう告げると、女性は民家の塀を伝いながら
歩きはじめた。だが、それも長くは続かず、すぐに前のめりに倒れ
込んでしまう。

「ちよっ……！」

見ていられなくなり、俺はとつさに駆け寄り、倒れかけている女
性の体を支えた。抱きかかえるような体勢で受け止めたおかげで、
なんとか地面に激突するのは防ぐ。

「ッ!? やめてッ!!」

「……!?!」

だが、女性は俺のことを突き飛ばし、支えがなくなった体は膝か
らその場に倒れてしまう。

わけがわからず、ただ茫然と立ち尽くし、苦しそうに倒れている
女性を見つめる俺。

そして、すぐに異変に気付く。

女性は上半身を起こし、自分の体を抱きしめながら震えだしたの
だ。先ほど見た手足の震えどころの騒ぎではない。今は全身が震え
ており、見ているだけでもわずかな恐怖を感じる。

異変はそれだけでは止まらない。

「う……ああ……。いや、ダメ……！」

唐突に頬を紅潮させ、あえぎ声のようなものまで発したのだ。
「ん……っ、はああ、あ……!!」

苦しさに体をよじらせるせいで、妙な衣擦れの音までする。

不謹慎だとは思いつつも、こちらまで変な気分になりそうだった。

「あ、あの……。俺、救急車呼びますんで、その……ちよっと待っ
てて下さいね」

これ以上女見ていてはいけないと思い、俺は女性から目をそらし、
ズボンのポケットから携帯電話を取り出した。

119番をプッシュし、耳に当てる。コール音が鳴り始めてすぐ、
オペレーターと思しき男性が電話に出た。

「あ、すみません。急病の方がいまして。場所は……」
現在地を告げようとした、その刹那のことだった。

ついさっきまで苦しそうに地面に伏していた女性が、いつの間にか起き上がり、携帯電話を持っていてる方の俺の腕をつかんでいた。

「……」
だが、女性は何も言わない。ただひたすら、俺の腕をつかんでいる。

ややうつむいているせいで、表情はよく見えない。

「……え、えっと」

電話口からオペレーターの声が聞こえていたが、思わず女性の方に話しかけてしまっていた。

「今、救急車呼んでますんで。すぐに助けがくると思い……」

「……ちようだい」

女性のくぐもった声が、俺の言葉をさえぎる。

「え？」

その声に反応した直後、女性はゆっくりと顔を上げ始めた。

目が合った瞬間、俺は差し出されたあまりの異常事態に戦慄する。

血を落としたような、真っ赤な瞳。

そして、先と変わらぬ紅潮した頬と、口元に不気味な笑みを携えて、俺を見つめていたのだ。

「……ッ……」

冷たいてで背筋を撫でられるような感覚に、思わず女性の手を振りほどき後退する。

だが、女性はおぼつかない足取りで、ユラユラと体を揺らしながらも距離を詰めようとする。

「ちようだい……。ちようだい……。もう、我慢できないの」

くぐもった声で、わけのわからないことまで呟き続けている。

思わず後ずさる俺の目に、さらなる異変が飛び込んで来た。

女性の口元。ちょうど上奥歯のあたりから剥き出ししている犬歯。……いや、犬歯という表現ではあまりにも可愛らしすぎるか。それは、こう表現するのが相応しい。

「牙……だって……？」

不気味な微笑みを従える女性の口元からは、そうとしか例えようのない、鋭く長い歯があつた。

突き刺されれば堪え難い痛みが痛覚を刺激することは、容易に想像できる。それほど残酷で凶暴なものが、なぜこんな人間の女性から生えているのか。

「ちようだい……、お願いだから……」

俺の無駄な思考を、上ずった声が停止させる。気づくと、女性は俺の目の前まで迫っており、今にも体に触れようとしていた。

とつさに距離を開けようとする。だが、いつの間にか俺は、民家の塀まで追いつめられていた。

逃げ場を失った俺。その循環、女性、いや、化物の妙に冷たい手が、勢いを増して首を押さえつけるのを拒否することができなかった。

「が……っ、は……！！」

首を絞められている息苦しさと、押さえつけられた勢いで強打した背中 of 痛みに、うめき声を上げる。

恐怖で心拍数を急上昇させながらも、俺にはまだ、死の恐怖から逃れようとする余力が残っていた。

必死に化物の手を引き剥がそうとする。だが、首を絞めつける腕はビクともしなかった。

首を絞められているせいで、確かに体の力はうまく入らない。

だが、相手はかなりの細腕。本来なら男が力負けするはずがないのに、その常識が通用しないほどの腕力だ。

「ちようだい……。ちようだい……」

その間も、化物は鋭い牙を剥き出しにしたまま、同じ言葉を繰り返している。

「……や、め」

ふさがれた気管にできたわずかな隙間から、絞り出すように声を発する。

だが、そんなことはお構いなしに、化物の牙は少しずつ。だが、確実に俺の首筋へと近づいていた。

「血……。血を……」

鼓膜を震わせる、化物の囁き。

容赦なく、化物の口が大きく開かれる。

生温かい吐息が首筋を撫でまわし、鳥肌が立つ。

死と隣り合わせの恐怖と、身を任せてしまいたくなる官能さ。その2つが同居しているような、異常な感覚が、俺の全身をつつみこんでいるのが想像できる。

それでも、俺にはまだ前者の感覚が強く残っていた。

迫りくる牙から逃れようと、必死に首を反らせる。だが、そんなことで逃げられるわけではない。化物の牙は、今にも俺の首筋に突き立てられようとしていた。

“ 殺される ”

その言葉が頭をよぎり、固く目を閉じる。

死ぬのか？ 俺は、ここで？

嫌だ……。

ちがう、ダメだ……！

死にたくなんかない。死んじゃダメなんだ。

俺は、約束したんだ。もう絶対に、傍を離れないって。

何があっても、これから絶対に俺が守り抜くって。

あの日……。アイツが死にかけたあの日。俺はそう誓ったんだ。

だから、俺は死にたくない。死ぬわけにはいかない。

……なのに、俺は“ また ”、こんなにも非力だ……！！

「なんだ。威勢がいいのは口だけかよ」

不意に、そんな声が聞こえてくる。

俺の思考に問うような、力強くも冷え切った女の声。

俺は閉ざしていた目を開き、声のした方へ視線を向けようとした。

その刹那、

「がっ……!?!」

うめき声と同時に、化物の手が俺の首から外れる。

だが、それは当然、化物が自らの慈悲で獲物を逃したわけではない。

声の主。突然の襲撃者。

俺も、そしておそらく化物も想定していなかったイレギュラーに、その細い体は吹き飛ばされたのだ。

同時に、俺の気管も圧迫感から解放され、止められていた酸素の供給が始まる。一斉に肺へと流れ込んでゆく新鮮な空気感覺到、思わず崩れ落ち、むせ返ってしまう。

「お前さあ、そんなんでよく私を止めようと思ったな。逆に尊敬するね」

咳きこむ俺の頭上から、そんな言葉が降り注がれる。

止める？ 何の事だか俺にはさっぱりわからない。

俺は、まだ気道の確保をし切れていない首を押さえながら、頭上を見上げる。

そこには、見覚えのあるシルエットが立ち尽くしていた。

艶やかな黒髪。人形のように整った顔立ちと、切れ長の双眸。

高校の制服をドレスにでも見違える、洗練された体躯。

見誤りようのない、その姿は紛れもない、

「……舞姫」

俺の口からは、思わず下の名前が零れていた。

だって、仕方がないだろ？ その姿は、そうとしか言いようがな
かったのだから。

夜風になびく黒髪を、雲の切れ間から覗く月明かりで煌めかせ、
しなやかに立ち尽くす。

“夜桜舞姫”という名に恥じない在り様だったのだから。

第二章 理想に狂うモノ？

ここ数日、僕の目覚めは最悪だった。

目覚めて最初に感じるのは、こめかみを圧迫するような頭痛。

立つことなんかできないし、横になっても、血管が脈打つた
びに痛みが響く。結果、全身を蝕んでいる倦怠感から逃れるすべを
失うのだ。

だが、夕方になれば少しずつ体調がすぐれてくるのもわかっ
ている。これも、ここ数日は毎日のことだ。

僕はゆっくりと目を閉じ、視界いっぱい広がる古びた木造ア
パートの一室の天井という、味気ない風景を遮断する。

眠れなくてもいい。脳に余計な情報を入れ、負担をかけないよう
にするためだ。脳に80%以上の負荷をかける視覚を閉ざすだけ
でも、頭の痛みはかなりマシになる。

眠れようと、眠れまいと、ただひたすら陽が傾くのを待つ。

多くの“人間”は、こんな僕を見て「哀れだ」とか「可哀想だ」
とか、そんな憐れみの言葉をかける。そして、その言葉がどれほど
傷をえぐっているのかも知らずに、自分が優しい人間だと認識し、
自己陶醉に浸るのだろう。

僕も、たくさんそんな言葉をかけられた。それが、優しさによる
ものならまだ救われたかもしれない。

嘲笑を目的とした、悪意の憐れみ。

聞き慣れてしまうほどに。

聞き飽きてしまうほどに。

何度も何度も聞かされた。

少し前までは、それがひどく嫌だった。

“自分が自分でなくなればいい”とさえ思った。

でも、そう思う必要はもうない。

なぜなら、僕は“本物”になったからだ。

昔みたいな偽物じゃない。

本物となり、偽物がやっていたことと同じことをする。

その行為に。

その存在に。

誰もが恐れ、ひれ伏す。

そんな存在になれたのだ。

だから、今はひたすら目を閉じる。

目を閉じて、夜を待つ。

昼の不自由と、夜の自由。

僕という存在を縛り付けるその対立こそ、僕が“本物”に相応しい存在だという証なのだから。

第二章 理想に狂うモノ？

否応なしにあふれ出すあくびをかみ殺す、高校生活2日目の朝。俺は昨日の朝と同様、渚沙と一緒に通学路を歩いていた。

「まったく、学校指定の参考書があんな個人経営に近い書店で売ってるわけないじゃん」

隣を歩く渚沙が、昨夜の俺が夜道を駆けながら想像していたのと似たような言葉を投げかけてきた。

俺は何も言わず、ただ苦笑いをこぼす。

だが、素直に笑えていないのは俺自身もわかっていた。

夜道を走ってまで書店に駆けこんだというのに、目的の本が無かった。だから、悔しいけど肩を落として帰りました。それだけのことなら、笑い話にもなっただろう。

考えないようにはしているものの、どうしても昨夜の出来事が思い出されてしまう。

だって、俺はあと少しで……死……

「ねえ」

「……！」

渚沙の呼びかけに、俺は思考を中断する。

声のしたほうを見ると、渚沙が心配そうな目で俺を見つめていた。いつもの活発そうな目からは想像できない、とても悲しげな目で。

「あ……ああ、ごめん。そうだよな、あんまりあわてて買いに行かなくてもよかったよな」

渚沙が何かを言う前に、俺はそう言って取り繕う。

なるべくいつもの調子で話したつもりだったが、渚沙は詮索するような目で見つめてくる。

が、それもしばらくすると無くなって、

「あつそ。ま、自業自得ね。せいぜい授業中に居眠りしないように気をつけなさいよね」

そう言つて、肘で俺の脇腹を小突いてくる。本当はいろいろ気になつてはいるのかもしれないが、これ以上は追及しないでくれるらしい。

我ながらごまかすのが下手だとは思つているし、俺が取り繕つた言葉を述べたのもわかつているのだろう。がさつに見えて、案外気がつくタイプなのだ。

昨夜の出来事は、確かに気になっている。

けど、それで渚沙を心配させたくはなかった。

渚沙だけじゃない。竜成はもちろん、これから友人になつていくであろう新しいクラスメイトたちにも心配はかけたいとは思わない。申し訳ないけど、ここは渚沙の心遣いに甘えさせてもらうことにしよう。

俺は考えるのをやめ、雑談を交えながら歩いてみると、すぐに学校に着いた。

登校してくる人の波に紛れつつ、1年生の教室が並ぶ4階まで登つたときだった。

「オーツス！ 今日もアツアツだなあオイ！」

後ろから肩を組んできながら、そんな言葉をかけてくる男。無論、竜成だ。

「あ……っ、あ・ん・た・ねえ……！ 昨日から顔合わせる度に夫婦だの何だの、いい加減にしなさいよね！！」

渚沙が顔を真っ赤にしながらも、拳を固く握りながら、そう怒鳴りつける。

「おいおい、落ち着けつて渚沙。……それと竜成、頼むからさ。朝から誤解を招くようなこと言つのやめてくれって」

俺は、今にも殴りかからんばかりに猛々しい構えをとっていた渚沙をなだめながら、竜成にそう言い聞かせる。

これからの高校生活、さすがに毎朝これじゃあ俺の身がもたない。

納得いかない様子ながらも、渚沙はとりあえず落ち着いた様子。そして、不躰な竜成にも自分の願いを告げたところで、俺たちは各々の教室に向かおうと廊下を歩きだす。

3人で廊下を歩いていると、2人組の女子学生とすれ違う。盗み聞きするつもりはなかったのだが、察するに、『連続噛みつき魔事件』のことを話していたようだった。

「昨日も出たみたいだよな」

「え？ 何が？」

突然口をひらいた竜成に、俺は呆けた言葉を返す。

「噛みつき事件だよ、噛みつき事件」

至極当然のごとく告げる竜成。どうやら、女子学生の話が耳に入ったのは俺だけじゃなかったらしい。

というか、竜成の場合は故意的に聞いたのかもしれないが……まあ、それは今は気にしない。

「あ、ああ。そうなのか？」

「そうなのかって、今朝だってニュースでやってたじゃない。真護、見てないの？」

今度は渚沙からも問われる。

「えっと……。そ、そうなんだ。俺、今朝はちよつとバタバタしててな。テレビはよく見てなくて」

俺はそう答える。

正直言つて、今朝のニュースのことは本当によく覚えていなかった。

昨夜の出来事のせいであまり寝坊してしまったというのもある。だがそれ以上に、昨日のことが気がかりで、有線みたいに流れているニュースの内容なんか頭に入っていないのだ。

そんな俺に、渚沙が昨夜の事件を説明してくる。

なんでも、昨夜襲われたのは3人なのだそうだ。

男性が2人。飲み会の帰りに公園で風を浴びていた社会人の中年男性と、夜遊び目的で家を出たばかりの少年。

そして、レポート作成で帰りが遅くなった大学生の女性が1人と
いうことらしい。

手口も、いつも通り。だが、1つだけ奇妙なことがあったという。
「一度に別の場所で、同時刻に？」

俺は渚沙から言われた言葉を、そのまま復唱する。

中年男性が噛みつき魔に襲われた場所は、この学校からそう離れ
ていない場所にある小さな公園で、少年が襲われたのは、先日事件
があった住宅街にあるバイク置き場。

そして、女性が襲われたのは、駅を挟んだ南口の路地だそうだ。

それぞれ数キロは離れた場所だというのに、被害者は一様に、襲
われた時刻を「深夜0時前後」と証言しているのだという。

「なんかよお、物騒になったもんだよなー、この辺りも」

「アンタの口から治安を気にするような言葉が出てくるなんて。不
気味だからやめてよね」

「んだよー、ナギ！ オレだって少しは治安っつーもんが気になん
だよ」

「アンタが気にしてるのはアイドルの握手会日程だけでしょ？」

「それを気にするなっつーのか！！？ オレの青春を返せええええ
え！！！」

2人が日常を謳歌している中、俺の意識は昨夜の非日常に絡
めとられていた。

俺が死にかけたのは、被害者が襲われたのと相違ない時間帯。そ
の事実が、昨夜の俺が死と隣り合わせの状況に置かれていたという
現実を強調していた。

血を落としたような、真紅の瞳。

人間のものとは到底思えない、鋭利な牙。

圧倒的な殺意と官能的な空気が漂っていた、奇妙な感覚。

俺の身に降りかかった、ありとあらゆる事象が鮮明に思い出され、
俺の肌感覚を嫌悪感で満たしていくのがわかる。

そして、忘れられないのが……

「新堂真護」

背後から投げかけられる、“そこを歩いている男の名前”というだけの形式的な呼びかけ。

どこかで聞いたことのある、刺すような力強い声音に、俺は即座に振り返る。

そこにいたのは、想像通りの人物だった。

「夜桜……舞姫さん」

この高校の女子の制服を着て、廊下のど真ん中に立ち尽くす少女の名を、俺は呟く。

一緒に振り返った竜成は、何か都合の悪いものでも見たかのような表情を浮かべており、渚沙はもまた、夜桜の不遜な態度に警戒したのか、若干身構えるような体勢をとっている。

普通の高校の、普通の朝。普通の校舎4階の廊下に、明らかに普通ではない空気と沈黙が漂う。

その雰囲気を感じ取り、こちらを見ている周囲の学生をよそに、夜桜は不意に口を開く。

「話がある。ちょっと付き合え」

「……」

そう言うと、俺の答えを聞かずに、夜桜は踵を返した。

俺もそれに続くように、一步踏み出す。

「お、おいっ、マモ……!?!」

「真護、何かあったの?」

そんな俺に、不安げな言葉を投げかけてくる、親友2人。

俺はそんな2人の方に顔を向け、

「大丈夫。大した話じゃないのは、俺もちゃんとわかってるから」
そう言い残し、すでに階段の踊り場に姿を消した夜桜を追った。

第二章 理想に狂うモノ？

###

雲の切れ間から覗く月明かりを受ける彼女は、圧倒的な美しさを放っていた。

夜桜舞姫。

その名に恥じない美しさと立ち振る舞い。

地に片ひざを着く真護を、まるで見下しているかのような、憐れんでいるかのような表情にさえ、非を打つ手段を与えようとはしない。

ほどなくして、月明かりが全て届くの邪魔していた雲が完全に立ち去り、夜の闇に小さな灯を与えんとする光が強さを増す。

それに応じるかのように、夜桜舞姫という少女の存在感……。

いや、“存在感”などという良心的な言葉では表現できないか。月明かりを背負う彼女が纏うものは、紛れもない“神々しさ”。

そこに存在していることに、何人の否定も許しはしないほどの、圧倒的な神々しさを彼女は持ち合わせていた。

完璧で、

美麗で、

圧倒的で、

神々しくて、

けど……、

なぜか彼女が“人間の少女”だということを、真護は忘れることができなかった。

乱暴に扱えば、たやすく碎け散ってしまうような……、そういうどこか儂げな存在な気がした。

「……？」

不意に、舞姫が真護から視線を外した。

それに倣うように、真護も舞姫の視線の先に目を向ける。

目に映ったのは、今まさに地面から体を起こそうとしている化物の姿だった。

吹き飛ばされた衝撃で、着衣と髪の毛がやや乱れている。だが、そんなことなどどうでもいいとも言いたげな様子で、ニタニタと笑いながら俺たちの方へ体を向けてくる化物。

乱れた髪の間から覗く目は、明らかに焦点が定まっていない虚ろな様子だ。

頬の紅潮も、先ほどより増しているように見え、一種の嫌悪感を覚える真護。

「結構本気で蹴り飛ばしてやったつもりだったんだけどなあ。やっぱり、痛覚とかその辺も人間のスペックとは違ってくるってこと？」

不気味な化物の在り様を見て、面倒くさそうに頭を掻き回す舞姫。その姿は、月明かりを纏う神々しい立ち振る舞いとは全く対照的だった。

「まあ、いいんだけどね。お前、見たところただのガキみただし。面倒くさいから一気にカタつけさせてもらうぜ？」

舞姫は、まるで今後の段取りを説明するかのような口ぶりで化物にそう告げると、左手に持っていたスクールバッグを真護に放り投げた。

反射的に、それを受け取る。

「すぐ済むから、ちょっと持つとけ」

そして、それだけ告げると、舞姫は真護の言葉を待たずに化物との距離を一步詰める。

すぐに立ち止まると、力強い意志のようなものが宿った両眼を閉じて、右腕を広げた。

さらに、固く握っていた右手を解き、緩やかに開く。その手の形は、まるで“何かを掴もうとしている”かのようにも見える。

ほどなくして、彼女の口が開かれる。

発せられた言葉は、

「……ごめんね」

……それは、間違いなく誰かに向けて放たれた言葉。

何度謝っても、何度許しを求めても、決して許されない罪に対する言葉。

そんな風に聞こえた。

そして、事態はさらに動き出す。

彼女が発した言葉に応えるように、彼女が手をかざした空間が青白く発光し始めたのだ。

最初はビー玉程度の大きさだった光は徐々に巨大さを増していき、幼い子供くらいなら飲み込めてしまうほどの大きさへと膨張した。

やがて、光は膨張を停止する。だが、発光は未だ止むことはない。それどころか、まるで光の中で雷鳴でも轟いているかのように、何かがぶつかりあうような衝突音を立てている。

激しさを増す、発光と衝突音。

発光と衝突。

発光と衝突。

発光と

閉ざしていた双眸を、覚悟を決めた眼光を秘めて開く少女。かざしていた両手を、青き光の中へとねじ込ませる。

それをすぐさま引き抜く。

ただ右手を引き抜いただけではない。そこに、“何か”を携えていた。

怪しげな青い輝きは、少女の右手が引き抜かれるやいなや瞬間碎け散り、少女が掴んでいたものの正体が露わになる。

「……刀？」

それ以外の表現はあり得ないであろう物体。

舞姫の細い手が包み込んでいる柄の部分から、触れた瞬間に致命傷を与えんばかりの鋭利な切っ先まで一直線に伸びており、無駄な装飾は一切ない。鏢さえもだ。

だが、それ以上に、その刀には違和感があった。

そして、その正体はすぐに理解できた。

柄が漆黒色に染まっているのもおかしい話だが、それ以上に妙なのが刀身である。

本来の刀に使われるはずのそれは、鉄という名の物質のはず。だが、その刀身は“鉄”などという常識の範囲に収まるような代物ではない。

それは、雪のように白く、

何者にも穢すことを許さないほど輝く、

残酷なほどに美しい、白銀しろがねの刀身。

柄が黒いせいか、そこから伸びた刀身の輝きは廃れることを知らず、煌々と輝いて見える。

真護がその美しさに見惚れているのをよそに、舞姫は迷いなく刀を構える。

両手で柄を握り、手首を返すような形で切っ先を化物に向ける。

その眼光は、言葉もないままに、容赦なく敵を斬り伏せることを宣言していた。

それでもなお、化物の口角の上がり具合は制御されていない。

一步一步、着実にこちらとの距離を詰めてきている。まるで、“恐れ”という概念を持ち合わせていないかのように、

舞姫の刀の間合いまで距離を詰めた刹那、化物の動きが止まる。

真護が気付いた異変は、化物が全く動かなくなったことでもなければ、夜道の静寂がより一層深くなったことでもない。

舞姫が握っている刀が、いつの間にか振り下ろされていたという事実だ。

あまりにも呆気なく。それでいて、凶悪なまでの速さ。

目で追うことすら侮辱に感じられるほどに、少女の太刀裁きは華麗だった。

つまり、その刀身が化物の体を両断したことは確認するまでもなく……。化物の体は、膝から下がなくなってしまったかのように地面へと沈められる結果となった。

「……………」
常軌を逸脱した目の前の光景に言葉が見つからず、ただ目の前で起きている現実離れた光景を眺めているしかない真護。

あの化物は、完全に倒したのか？

あの化物は、絶対に死んだのか？

自分は今、確実に生きてるのか？

自分はもう、殺されないでいいのか？

あらゆる思考が真護の脳裏を過ぎ去ってゆき、混乱する。

落ち着け……、落ち着くんだ新堂真護……！！

まず、俺は間違いなく生きていて、真夜中の住宅地で座り込んでいる。化物に襲われて、首を折られかけたからだ。だが、その脅威も去ったらしい。なぜなら、今あそこに化物は倒れているからだ。そして、化物をそんな状態に追いやったのは……。

「……………」
「……そ、そいつ、死んだ……のか？」

混乱している頭をなんとか整理し、真護はそんなつまらない質問

を投げかける。

「いや、死んでない。本当はぶつ殺してもいいんだけどさ、私の刀じゃ肉体そのものは殺せないんでね。それに、この女はガキだ。明日になったら目覚まして、普段通りの生活に戻るんじゃないかねえの？」

「肉体、そのもの……？」

舞姫の言葉を繰り返す真護。

そして、不意に目を向けた舞姫の刀を見て、真護は不気味な違和感を覚えた。

倒れている化物。振り下ろされた刀。

そこから見いだせる答え。『夜桜舞姫が持つ刀で化物を斬り伏せた』という事実は間違いないはず。

だが、その痕跡が一滴も見当たらない。

白銀の刀身は、今なお美しく不気味に。そして、不気味なほど美しい白銀色だった。それ以外の色は見当たらない。

なくてはならない、“赤色”さえも見当たらないのだ。

「チツ……、また余計なこと喋っちゃったよ」

そう吐き捨てると、舞姫は刀を掴んでいる手に力を込める。それに呼応するかのように、美しい刀身は切っ先から霧散を始めた。

切っ先から刀身の根元まで。刀身の根元から柄の先端まで。霧散に霧散を重ね、今までそこにあった、この世のものとは思えないほど壮麗な刀は、舞姫の手の中から姿を消してしまった。

「……」

次々と起きる非現実的な事象に、真護は再度言葉を失う。

「……！！」

舞姫が目の色を変える。そして、何も言わず真護に背を向けると、どこへともなく駆けだした。

「あ……！ ちょ、ちよつと！！？」

走り去るクラスメイトの背中に呼び掛ける真護。だが、少女は聞こえていないかのように駆け続け、すぐに路地の向こう側へと消えてしまった。

一人残される真護と、倒れ伏している化物一匹。

震える足を無理やり奮い立たせて立ち上がると、真護は一刻も早くこの場を立ち去ろうと、民家の塀伝いに自分の家へと歩き出した。

###

第二章 理想に狂うモノ？

夜桜に着いていき、屋上へと続く階段を登ってゆく。

屋上のドアを開けると、高所特有の風が吹きつけてきた。本来暖かみのあるはずの春風も、心なしか冷たく感じる。

それに構うことなく、夜桜は屋上へと足を踏み出した。

当然のことながら、朝のホームルーム前の屋上には、俺と夜桜以外は誰もいない。タバコの吸い殻が所々に落ちているのを見れば、それなりに出入りはされているようだが、掃除の目は行き届いていないらしい。

無言で俺の前を歩く夜桜。近寄りが見たいオーラが発せられているその背中に近づきすぎないように、俺もそのあとに続く。

落下防止用の鉄柵まで歩くと、夜桜は俺のほうに向きなおり鉄柵に寄りかかった。

そして、すぐに口を開く。

「単刀直入に言う。昨日のアレ、忘れる」

冷たい視線を向け、威圧的な態度で俺にそう告げてきた。

『昨日のアレ』が何を示しているのかは容易に理解できた。

そして、『忘れる』という言葉に込められた意味もだ。聞きたいのは承諾の言葉だけで、否定は許さないといつたところだろう。

だが、俺は彼女の目を見て質問を投げかける。

「何だったんだよ、アレ」

「忘れるつつつんだ」

同じ言葉を繰り返す夜桜。教えるつもりは毛頭ないらしい。

「俺は死にかけたんだぞ。あの化物、一体なんだったんだ。それくらい教えてくれたっていいだろ」

俺はなるべく穏やかに。だが、確かな意志を持って再度尋ねた。

夜桜は俺のクラスメイト。それは間違いない事実。だが、昨夜は人間離れたした行為を俺に見せつけてきた。クラスメイトを疑うようなマネをしたくないのが正直なところだが、油断はできない人間であることは間違いないだろう。

だが、心理的に身構えている俺をよそに、夜桜は面倒くさそうに頭を掻きまわすしぐさを見せた。眉間にはしわまで寄っている。

そこに、昨夜の月明かりを背負った神々しさはなかった。

それどころか、下手をすれば“社会不適合者”という印象さえ抱かれかねない。“美人”というのがせめてもの救いだろう。

やがて夜桜は小さなため息をつく、腕を組んで俺の目を見返してくる。

そして、口を開き、

「深夜0時」

「え？」

「だから、深夜0時だろ？ お前が昨日出歩いてた時間」

確認するかのような夜桜の言い回しに、俺は首を縦に振る。

「しばらく夜遊びはやめとけ。ここ数日で、ガキも増えてきやがったからな。私だって昨日は偶然見かけたただけなんだ。次はねえかもしれねえぞ」

「ガキ……？」

夜桜の口から出てきた言葉の意味がよくわからず、俺は顔をしかめる。

「こつちの話だ。とにかく、しばらく夜遊びはやめとけ」

それだけ言うと、夜桜は鉄柵から離れ、開きっぱなしになっていたドアに向かって歩き出す。

「ちょ、ちよっと待ってくれって！」

俺は夜桜を呼びとめる。

昨夜と違い、今日はその場で立ち止まってくれた。

「そんな説明じゃ納得できないって。昨日のアレはなんだったんだよ？ それに……。それに、夜桜が持っていたあの刀だ、」

「お前」

背を向けて黙っていた夜桜は、唐突に俺の言葉を遮った。

そして、

「……お前、思い出は好きか？」

「は……？」

あまりに見当違いな質問を投げかけられ、俺はあっけにとられた声を出す。

「別に思い出じゃなくてもいいや。そうだな……、記憶とか、過去とか。とにかく今の自分より前の自分だな。どうだ、好きか？」

夜桜の質問の意図は、正直言つてまったく理解できなかった。

だが、俺はその質問に対して、知らぬ間に考察を始めていた。

思い出や記憶。過去の自分が好きかどうか……。そんなこと、今まで考えたこともなかった。

思い返してみると、俺は何不自由なく、仲間や家族と変わらない毎日を送っていた。そして、そんな毎日を気に入つてさえいた。

特別な変化もなく、大切な人たちと笑って過ごせればそれでいいとさえ感じている。

それなりに学校行事だつて楽しんでるし、家族とは何度か旅行にも行った。

相対的に見れば、きっと“いい生き方”の部類に入るのかもしれない。

そして、俺自身もそんな自分が“嫌い”ではないのだろう。だが

「嫌、嫌、嫌……かな」

俺の出した答えを聞き、視線だけをこちらに向けてくる夜桜。

そう答えた理由を聞かれているような気分になり、俺は言葉を続ける。

「なんていうか、そんなこと考えたこともないし。ただ、俺は間違いないく嫌な生き方はしてなかった。だから、多分嫌いではないんだと思う。けど、他人に胸を張れるような生き方をしてきたかと聞か

れば、別にそんな生き方はしてこなかった。だから……」

そこまで言い、言葉に詰まってしまふ。

なぜだろうか。夜桜はただ、俺に今までの生き方が好きかどうかを聞いてきただけだ。

好きか嫌いか。それだけ答えればいい。そのはずなのに、俺にはそれさえ曖昧な答えしか出すことができない。

その事実が、もしかしたら自分は、今までとんでもなく中途半端な生き方をしてきたのかもしれないという現実を叩きつけてきた気がする。

「……っていうか、それに何の関係があるんだよ」

俺はこの妙な沈黙に耐えることができず、苦し紛れに言葉を発した。妙な質問をされていらだっているのか、つい語調が強まる。

「今のお前には、当分関係ねえ話だな」

おもむろに、夜桜が口を開いた。

「好きか嫌いかわからねえとか、平凡にもほどがあるぞ、お前」
「……っ」

痛いところを突かれ、思わず声が漏れそうになる。

「けどさ、それって安全な生き方でもあると思わねえか？」

「……安全な、生き方？」

夜桜の言い放った、意図不明な言葉を俺は繰り返す。

「ああ。だってそうだろう？ 自分の過去の思い出だのが特別大きくもねえなら、それを引きずったり背負ったりしないで生きていけるんだ。人は生きたら生きただけ、自分の過去が大きくなる。お前みたいに中身スラスカなら楽なんだろうけどさ、そこに“かけがえのないもの”とか“取り返しのつかないもの”なんて煩わしいモン突っ込んでみる。背負ってるモンが重くなりすぎて、バランス崩して落下でもさせちまったら、もうそれで終わりだ。砕け散って、自分の過去って何だったのか。思い出して何だったのか。そんなつまんねえことばっか考えるようになる。でもさ、そういうもの持ってなけりゃあ、そんな不安や絶望を持つこともなく、安全に生きてい

けるってことだろ？ それって最高じゃねえか」

夜桜の冷たい言葉に、俺はある種の説得力のようなものを感じていた。

自分の過去や思い出の希薄さ。

それは、確かに“失うものが無い”ということにも繋がるのかもしれない。

失うものが無いのなら、それを壊してしまうことに対する不安も無い。夜桜の言う、“安全な生き方”ができるのかもしれない。でも、なぜだろう。

それを口に出している夜桜自身が、そのことにひどく嘆きを感じているような気がしてならなかった。

失いたくないものを失ってしまった、

その悲しみさえも忘れようとしているような、そんな、つまらなそうな表情を浮かべていた。

「話が逸れちまったな」

さきほどの、冷たく不躰な夜桜の声で、俺は我に返る。

「とにかくだ、昨日のことはもう忘れる。関わるな」

それだけ言うと、夜桜は歩き出し、ドアノブに手をかけた。

「あ、あのさ……！！」

「チツ……。なんだよ、まだ何か用か？」

俺がもう一度呼びかけると、夜桜はあからさまにうんざりしたような態度で振り返った。

それでも、俺は夜桜にも同じ質問を投げかける。

「夜桜は、どうなんだ？」

「あ？」

「だから、好きなのか？ その、自分の過去……思い出が」

その問いに、夜桜は一瞬、射殺するような目つきで俺のことを睨みつけてくる。

だが、すぐに背を向けて、

「……好きだった」

そう短く答えたあと、

「今は、できれば忘れたいと思うほど嫌いだ」

そう言い残し、忌々しげにドアを閉め、屋上から立ち去って行った。

屋上に一人残された俺は、夜桜の口から発せられた答えの意味を考えずにはいらなかった。

第二章 理想に狂うモノ？

放課後の夕風学園図書館には、多くの人の姿があった。

元々かなり大きな教会だった建物を改装して造られたせいか、利用登録さえすれば学校関係者以外の利用も可能という珍しいシステムを採用しているのだそうだ。

俺もまた、その珍しい図書館を訪れていた。

今日の英語の授業において、明日までに仕上げなければならぬ課題が出された。隣の書店へ行き、家に帰ってから始めたのでは間に合わないと考え、今日のところは仕方なく図書館に貯蔵された参考書で間に合わせようと思ったのだ。

だが、実際に図書館に来てみて、俺は『仕方なく』だなんて考えたことを申し訳なく思った。

クロスウォールオブジェが飾り付けられた門を開けて最初に目に入るのは、利用者が本を読むための読書スペースだ。すでに数十人の利用者が、そこで読書を楽しんでいる。

その読書スペースがすでに圧倒的だった。

設置されている机は2つだけなのだが、奥行きはかなり長く、向かい合わせに座れば片方に50人以上は座れそうだ。

大きいだけではなく、見たところアンティーク製品のように、古めかしいが高価そうなイメージの装飾が施されているのがよくわかった。

なるべく足音を立てないよう、静かに読書スペースに立ち入った。館内の所々には読書スペースに設置されている机と同様、アンティーク調のデザインが施されたランプスタンドが設置しており、それが館内を照らしている。

フロアの隅には、教会だった頃の名残であろうマリア像がとん挫しており、本を読みふける利用者たちを見守っているような気がする。

上を見上げると、高い三角屋根に大きな窓が設えてあるのが見えた。外の天候は晴天。温かな太陽光が射し込んでいる。

さらに視線を下に移すと、目に飛び込んできたのは建物のちょうど2階に当たるフロアに立ち並ぶ巨大な本棚と、そこに収納された数え切れない本の山だ。

正面から見ただけでもかなりの量が蔵書されているのがわかるが、よく見ると、本棚の間にはところどころ奥へと続く通路が作られていた。つまり、その向こうにはさらに大量の本が貯蔵されているということである。

俺はそこで、学校のパンフレットには250万近くの本が蔵書されているとか書いてあったことを思い出した。その時は漠然と『たくさんある』としか思わなかったが、なるほど。“たくさん”なんて言葉で括ることはできないことがようやく理解できた。

「すごいな……」

「ありがとう。この子たちも、きっと喜んでると思うわ」

学校の図書館にしては大きすぎるスケールに圧倒されていた俺の背後から聞こえてきた、透明感のある声。

あまりに唐突なことだったせいで、驚きの声をあげて飛び退く俺。そこに一斉に向けられる、読書中の人々の刺さるような視線。

慌てて取り繕い、なんとかそれ以上非難の視線を浴びることはなかった。

「ふふっ、驚かせてしまったみたいですね。失礼しました」

さつきと同じ声が聞こえてくる。

声のした方を見ると、そこには若い女性が立っていた。

年齢は20代半ば程。大人びてはいるものの、包み込むようなやさしさをのぞかせる顔立ち。

170センチ近くあるうかという長身に、豊かな胸の膨らみとウエストの細さがバランスよく同居した女性らしい身体つき。だが、白いロングシャツにワインレッドのロングスカートというシンプルな組み合わせの衣服を身にまとっているおかげで、扇情的な雰囲気

の一切が取り払われている。

肩のあたりで切り揃えられた栗色の髪も、清潔感で満ちていた。一般的に見れば、おそらくかなりの美人に部類する女性。見た目だけなら、夜桜といい勝負なのだろう。実際、俺も見惚れていないと言えは嘘になるほどだ。

ただそれと同時に、俺はこの女性に夜桜のような明確な“存在感”を感じ取ることが出来ずにいた。

何か……人間ではないような。

そういう浮世離れた雰囲気醸し出している女性だった。

「もしもし？」

「え？ あ、ああ」

その姿を見て呆けている俺を、不思議そうな顔で覗き込んでくる女性。

声を掛けられてようやく気がついたが、かなりの至近距離まで顔を近づけられていた。少しでも顔を前に動かせば、鼻と鼻がぶつかってしまいそうなほどには近づいている。

俺は慌てて女性との距離をとる。

「ああ……！ え、えええと……、その」

なんとなく気まずくなり、何か取りつくろうとしたが言葉が出てこない。

マズイ、このままじゃ図書館に来て見知らぬ女性に興奮してる変態だと思われる。

が、俺がそんなことで慌てているとは露知らずか。女性は口元に手を当て、クスクスと笑いだす。

「ふふふ。そんなに慌てなくても平気ですよ。アナタくらいの男の子だったら、女性を前にして緊張しない方が失礼だと思いますよ？」

そして、からかうような態度でそう告げた。

それを見て、俺もようやく少し落ち着くことができた。

見た目はかなり大人っぽい人だけど、実は結構子供っぽいところもあるのかもしれないと思ってしまう。

ひとしきり笑ったあと、女性は改まった様子で体の前に両手を重ね、丁寧にお辞儀をしながら、

「申し遅れました。ワタシの名前はマリア・クロスフィールド。この夕凧学園図書館の管理人を務めさせていただきます。あまりかしこまらず、マリアさんと呼んでください。以後、よろしくお願ひしますね」

そう言つて、包み込むような優しい笑顔を向けてくる。

「あ、ええと。新堂真護といます」

俺もまた、思いつく限り一番いい姿勢で頭を下げた。

明らかに年上の女性が頭を下げているのに（しかも敬語まで用いて）、俺がそうしないわけにはいかないだろう。

俺は慣れない挨拶を終え、顔を上げる。また何か言葉を探そうと思つたが、彼女が先に質問を投げかけてくれたおかげでその必要はなくなった。

「それで、新堂くん？ 図書館に来たつてことは、何か探してる本があるということでしょうか？」

「あ、はい。ええと、管理人さん」

「マリアさん」

「え？」

「さっき言つたじゃありませんか、『あまりかしこまらず、マリアさんと呼んでください』と」

そう言つてマリアさんは、呆氣にとられている俺のことを少し拗ねた様子で見ってくる。

「え、ええと……。た、確かにそうですケド……。その、今日会つたばかりですし。いきなり名前で呼ぶのはちょっ……」

「そうですか。……。確かにそうですね。わかりました。無理強いさせるわけには、いきませんから……」

俺が照れ隠しに言つたことなど気にも留めない様子で、彼女はそうつぶやく。そして、直視できないほどに悲しそうな顔をしてみせた。まるで仲の良かった主人に捨てられそうになっている小動物の

ような目である。

正直、俺には悪いことをしてしまった自覚は無い。だが、ここま
で悲しそうな顔をされると、理不尽なまでの罪悪感に首を絞められ
ているような錯覚を覚えた。

気のせいだろうか、読書スペースにいる男性利用客を中心に、殺
意のこもった視線が俺の全身をちくちく突き刺しているような気が
する。

今にも泣きだしそうな女性……。マリアさんを見た俺は慌てて、
「わ、わかりましたよ！ ええと、その……。マ、マリア……。さん
？」

やっぱり初対面の。それもこんな綺麗な人を名前で呼ぶのは気恥
かしい。

だが、それを聞いたマリアさんは雨上がりの空のような、一点の
曇りもない笑顔を見せ、

「わあ、ありがとうございます！ これからもそう呼んでください
ね」

「は、はあ……」

第一印象で感じた雰囲気とは真逆の振舞いを見せるマリアさんに、
俺は一種の脱力感のようなものを感じていた。見かけによらず、案
外子供っぽい人なのかもしれない。

ここまできて、俺はさっき言いかけた言葉に気づく。

「あ、そうだ。すみません、参考書を探しに来たんですけど」

「ああ、そうでしたね。こちらにありますよ。案内します」

言いながらマリアさんは、自分についてくるよう手のひらで示し
てきたので、それに従うことにした。

1階読書スペースを通り抜けると、左右に1つづつ設えてある2
階の蔵書スペースへと続く階段があった。マリアさんは、その左側
を登り始める。

2階へ上がると、さっきまでいた読書スペースを俯瞰するような
格好になった。そのまま視線を上げると、真反対側にも背の高い本

棚が大量に立ち並んでおり、数人が本を探しているのが見えた。

立ち並ぶ本棚の前を通り、棚と棚の間にできた3つ目の通路へ入っていくと、その奥にもそれぞれ10程の同じ背丈の本棚が立ち並んでいた。

純文学や海外小説。ビジネス書から資格講座本など、ここで目につくだけでもあらゆるジャンルの本が収められているのが見て取れる。

2つほど先の棚には俺の希望する参考書類もあった。

「教科はなんですか？」

「……あ、えつと。英語です」

実際に保存されている本の山を眺めていたところに声をかけられたので、慌てた様子で答えてしまう。

だが、マリアさんは特に気にした様子もなく、本棚に備え付けられた木製の梯子に登り、迷わず数冊の本を手にして降りてきた。

俺にその数冊を手渡すと、今度は向い合せになっている隣の本棚の前で屈みこみ、またしても迷うことなく1冊の本を抜き取り、俺に渡してきた。

そして、本を一冊ずつ指で示しながら、

「とりあえず、新堂くんは1年生だからこれくらいあれば大丈夫だと思いますよ。基本的な英単語と英文法の参考書。それから、これはリスニングCD付きのものですからヒアリングにも役立つのではないのでしょうか」

「……あの、」

「あ、最後に渡した教養本は大学生向けの難しい本ですけど、松本先生の課題でしたら、これくらいやっておいたほうがいくらかもしれませんよ」

「……マリアさん？」

「はい？ まだ何か足りませんか？」

俺が何か超常的なものに遭遇したような目で呼び掛けると、マリアさんはそう答え、再び何かを言いながら本棚のほうに視線を移し

た。

「いやいや、マリアさん大丈夫です。本は全然足りてますし、これだけあれば絶対に役立ちますよ」

俺がそう言うと、マリアさんは手にしかけた本を棚に戻し、「そうですねですか？」などとつぶやいた。

「はい、ありがとうございます。ただ、その……。俺、マリアさんに1年生だつてこと言いましたっけ？ それに、なんで英語の担当が松本先生だつてわかつたんですか？」

率直な疑問をぶつける。

そう、俺は自分の名を名乗りはしたが、自分の学年を忘れただことに気づいていた。

伝えるタイミングを逃してしまつたので黙っていたが、間違いなくそれは伝えていないこと。なのに、マリアさんはそれを当然のように理解していた。

そればかりか、俺を担当する英語教師が誰かまでの確に当ててみせたのだ。

驚いている俺の問いに、マリアさんは穏やかな笑顔で、

「だつて、新堂くんは今日初めて見る顔ですし」

「え？ ……あの、それじゃあまるでこの図書館に来る人全員の顔を覚えてるみたいに聞こえますけど」

「ええ、覚えてますよ。それどころか、この図書館にある本なら、どの棚の何処にどんな本が置いてあるのかすべて頭の中に入ってます。だから、ここには検索用のパソコンなどは置いていないんですよ。それで調べるよりも、私に聞いたほうが早いですからね」

「……」

さも当然のごとく答えるマリアさんに、俺はただ呆然とするしかなかった。

「……いや、でも、松本先生のことは？」

「それは私の予測です。初めて見る顔の子で、借りに来たのは参考書。これだけでも新しい学生さんというのわかりました。さらに、

この時期に英語の参考書を借りに来る学生さんといえば、毎年早々学生さん泣かせな課題を出す松本先生かな？ と思いましたので」「そう言ってマリアさんは、屈託のない笑顔で微笑みかけてくる。さつきは子供っぽい人だと思ったが、やっぱりこの人、どこか人間らしさが薄い気がする。

「完全記憶保持者」

不意に背後から聞こえてくる、気だるさに満ちた声。

「今まで生きてきた中で、自分が見たり聞いたりしたもの寸分違わず覚えてるつつう……まあ、化け物みてえな能力だな。マリアはそいつを持ってんだよ」

声のしたほうに視線を向けると、そこには知った顔があった。

通路を挟んだ本棚に寄りかかる、切れ長の双眸に艶やかな黒髪。

クラスメイトの夜桜舞姫だ。よさくらまいひめ

「あら、夜桜さん。いついらしたんですか？ 事務室で待っていてくれればよかったのに」

「あんなオカルト本ばっか置いてある事務室でくつろげるかつつうんだよ」

気を使うマリアさんに、夜桜はそんな悪態を吐いてみせた。

「えっと、お知り合い……さん？」

お互い知った仲でなければ交わさないような言葉を発する2人を見て、俺はそんな疑問をこぼす。

見るからに真逆なこの2人が知り合いだなんて想像もつかない組み合わせだ。俺が呆気にとられるのも仕方がない……などと考えていると、

「ああ？ テメエにや関係ねえよ。つーか、なんでこんなところにんだよ。関わるなつつつただろうが。日本語わかんねえのかよ」

そんな暴言を吐いてきた。

まあ、この清楚なマリアさんに暴言を吐くくらいなんだ。俺に吐くのは当然か。

だが、夜桜はすぐに自分の失態に気づくことになる。

「……新堂くん？　もしかして、理想狂クラシケに遭遇したんですか？」

「は？　クラン、ケ？」

マリアさんからわけのわからない問いを渡され、オウム返しのように同じ言葉を繰り返すしかない俺。

一方の夜桜は、自分が余計なことを言ってしまったことに気づいたらしく、あからさまな舌打ちをしながらうんざりした様子で頭をかき回しながら、

「いいよマリア。そいつが遭遇したのはガキなんだってば」
そうマリアさんに告げる。

どうやら、何としてでも俺にこの件に関わらせたくないらしい。

だが、俺も今を逃せば昨日のアレが何だったのか一生わからない気がしていた。正直、それは危うく死にかけた俺にとってはあまりにも納得のいかないことである。

「あの、マリアさん？」

俺の呼びかけに、マリアさんが振り返る。

「その、何なんですか？　夜桜の言うガキって。それに、クランケ？　とかいうのも……」

「関係ねえつつつてんだろ。首突っ込むんじゃねえよ」

言いながら、夜桜が俺に詰め寄ってくる。

だが、マリアさんがそれを手で制止して、

「知りたいですか？」

真剣なまなざしで問われる。

俺は、それに対して無言でうなづく。

「……いいでしょう」

「おい、マリア……！！」

マリアさんの出した答えに、夜桜は語調を荒げる。

「別に深くまで巻き込むつもりはありません。ただ、新堂くんが遭遇したのが本当に理想狂クラシケの一端であるのだとしたら、ある程度の知識を持ち合わせていない方が危険です」

「……」

夜桜は納得いかない表情でマリアを睨みつけている。

やがて諦めたのか、夜桜は納得いかない様子で通路を出て行ってしまった。

確かに本当のことを知りたいという思いはあったが、俺は何となく申し訳ない気持ちになっってしまう。

「あの……」

「？ ああ、大丈夫ですよ。夜桜さんはあれでいて、本当は新堂くんを気遣ってるだけなんだと思いますから」

マリアさんはそう言っていると、夜桜が歩いて行った通路を歩きながら、「まずはその参考書の貸し出し手続きからですね。お話はそのあと、事務室でゆっくり聞かせてあげますから」

振り返り際そう告げ、慈愛に満ちた微笑みを見せた。

第二章 理想に狂うモノ？

本の貸し出し手続きを済ませ、マリアさんに続いて受付の奥にある事務室に向かう。

話の最中の貸し出し手続きは代行の方に任せたとすだ。

事務室に入る際、男性利用者の射殺するような視線をいくつも浴びた気がしたのだが、気のせいだと思ふことにしよう。

木製の扉を開けて事務室に入ると、ここにも多くのアンティーク製家具が設えてあるのが目に入った。

大きな革製の本が一冊置かれた事務作業用の机や、そのすぐ傍にある大きめの本棚。向い合せになっている茶色のソファと、それに挟まれるように置かれた背の低いテーブル。部屋の隅に置かれているランプスタンドまで、すべてアンティーク製品だ。

以前教会だったところから使われていたものを引き継いだのか、それともマリアさんの趣味なのか……。

「適当にかけていてください」

俺がそんなことを考えていると、マリアさんが部屋の奥へ向いながらそう勧めてきたので、言われた通りソファに座ることにした。

向い合せになっている反対側のソファには、先に事務室に来ていた夜桜が腕組みをしてソファに寄りかかっている。

俺が座ったのを一瞥すると、あからさまに嫌そうな顔を見せたと思いきや、すぐにそっぽを向いてしまった。

なるほど。俺が昨日の話に深入りするのが相当気に入らないらしい。

なんとなく気まずくなっていると、飲み物の入ったグラスを3人分乗せたトレーを持ったマリアさんが奥から戻ってきた。

「コーヒーで平気ですか？」

俺が「はい」と答えると、コーヒーの入ったグラスを俺の前に置

いてくれた。

夜桜の前にもグラスを置いたあと、マリアさんは自分の事務作業用の机コーヒーを置きつつ、椅子に腰をかけた。

向かい合わせに座り無言でコーヒーを飲む夜桜と、何やら机の上の本をめくり始めるマリアさん。

おまけに落ち着いたアンティーク調のランプスタンドから放たれる灯り。

事務室にしては場違いな気品が漂いすぎている空間に、もしかしたらこの部屋は談話室だったのかもしれないなどという想像を、俺は勝手に膨らませていた。

ふと、俺は自分だけが手持無沙汰になっていることに気づき、目の前にあるコーヒーの入ったグラスを手を取った。

コーヒーでいいかと聞かれ思わず平気だと言ってしまったけれど、正直言つて、コーヒーなんて滅多に飲まない。というか、苦い液体というイメージが邪魔しているせいでほとんど飲んだことがないと言つてもいいくらいだ。

だが、初対面で半ば強引に話を聞こうとした俺を許容してくれたばかりか、こんなに丁寧なもてなしまでしてくれる人に注文をつけるような無作法なことはいできない。

俺は若干の覚悟を決め、コーヒーを口の中に流し込んだ。

……これから俺は、なにか重大な話でも聞こうとしている状況だというのに、たかだかコーヒーに覚悟を決めなければならぬとはそんな一抹の情けなさを覚えつつ、目を瞑つて口に含んだコーヒーを味わってみる。

しかし、俺が想像していたような苦味はまったく感じなかった。

いや、むしろ……、

「美味しい」

俺の口をついて出ていたのは、そんな感想だった。

「ふふっ、やっぱり少し砂糖を多めに入れておいたのが正解でしたね」

いつの間にか本のページをめくるのを止めていたマリアさんが、俺のほころんだ表情を見てにこやかにそう言う。

「ええ。実は、コーヒーはあんまり飲んだことなくて……。でも、これはすごくおいしいです」

「気に入ってもらえたのでしたら、光栄ですよ」

そう言いながら、お辞儀をするような動作を見せるマリアさん。

やっぱりどこか子供っぽい人だな。そう思った矢先のことだった。

「さて、一息ついたところで……」

マリアさんの表情に、戯言や戯れ事の一切を許さない真剣さが宿った。

急に張り詰める事務室の空気に、自然と俺も息をのんでしまう。

「新堂くん、昨日の夜あったこととこのを詳しく聞かせてもらえますか？」

「……はい」

マリアさんに言われるまま、俺はすべてを話した。

真つ暗な夜の街に、無防備な姿で繰り出したこと。

女性が外灯の下で、苦しそうにうずくまっていたこと。

介抱しようとしたら、人とは思えない様子で襲いかかってきたこと。

その女性……、化物に危うく首を噛み千切られるところだったということ。

そして、

「舞姫さんが助けに来てくれた……、ということですね」

話したことを確認するように繰り返すマリアさんに、俺は無言でうなずく。

事務室内に、居心地の悪い沈黙が漂う。

ひとしきりその沈黙が続いた後、マリアさんは大きく息を吐き、

口をひらいた。

「舞姫さん、あなたが言うには、昨日斬ったのは子供なんですよね？」

「ああ、昨日斬ったのは女だったから間違いなえと思うぞ。最初に襲われたのが女なんだから、親玉は男って考えるのが妥当だろ」

「そうですか。では、もちろんその男性の過去も……」

「それが分かってりゃあ苦労しねえっつーの。ったく……」

そう言っただけで夜桜はテーブルに置いていたグラスを再び口に運び、グラスのコーヒーを全て飲み干してから、乱暴にテーブルの上に置いた。

一方の MARIA さんも、口元に手を当てて考えるようなしぐさを見せている。2人の会話の意味が全く分からない俺は、完全に蚊帳の外だ。

「……」

あまりしつこく言いたくはなかったので、早く昨日起きたことの真実を教えてほしい気持ちを抑えて待っていると、MARIAさんが俺の方に向き直り、おもむろに口を開いた。

「新堂くん、一つ質問があります」

「質問？」

繰り返す俺に、MARIAさんは一拍置いたあと、その質問を投げかけてきた。

「あなたにとって、“一番失いたくない思い出”はなんですか？」

「思い、出……？」

あまりに突拍子のない質問。それこそ、小学生の卒業作文の課題みたいな質問だ。

俺は思わず、再び同じ言葉を繰り返してしまった。

そんな様子を見て、MARIAさんが付け加える。

「ええ、思い出です。思い出ではなくても、忘れたくはない過去や人間。出来事でも構いません。とにかく、自分がどんな代償を払っただけでも失いたくない思い出。何か、ありませんか？」

「え、えーっと……」

俺は考えを巡らせる。

……と同時に、俺はつい数時間前に同じような質問をされたことを思い出していた。

俺と向かい合わせに座っている少女。夜桜舞姫にだ。

自分の思い出が、“好き”かどうか……。そんな質問だった気がする。

俺は、その質問にハッキリとした答えを出すことができなかった。それは、あまりにも普通の生き方。夜桜の言葉を借りて言うなら、安全な生き方だからだ。

親友と呼べる友達だっているし、今は出張で家にいない家族とだつて旅行に行ったりもした。

学校の行事だつてそれなりに楽しかった記憶がある。

だから、俺は「嫌いではない」と答えたのだ。

そして今、マリアさんにされている質問もまた同じ……。いや、もしかすると、それ以上に重いものなのかもしれない。

どんな代償を払つてでも、失いたくない思い出。

あまりにも普通で、あまりにも安全な生き方をしてきた俺には、とてもじゃないけど……、

「……ありません」

それ以外の言葉を見つけることができそうになかった。

正直言つて、悔しいとか情けないとかいうよりも、悲しかった。

16歳やそこらで何を言っているのかと言われてしまうかもしれない。けど、自分の今までの生き方があまりにも重みに欠けるものではないかと考えてしまい、胸の奥が特大の鉛でも括りつけられたような重苦しさでいっぱいになったのだ。

だが、俺のそんな思慮を知ってか知らずか、マリアさんは口元を少し緩めながら言う。

「そうですね。なら、きっと新堂くんは大丈夫でしょう。安心しました」

「安心、ですか？」

マリアさんの言葉に、俺は思わず睨むような目を向けてしまったことに気づき、すぐに視線をそらす。

そんな様子に気づいたのか、マリアさんは取り繕うような言葉で続けた。

「気を悪くしないでください。別に、新堂くんのことを見下したかったわけじゃないんです。危険に巻き込まれる可能性が少なくなっただからこそ、そう言ったんですよ」

「危険？」

今度は本当に言葉の意味がわからず、俺は怪訝な表情を浮かべた。

「ええ。新堂くんが聞いたがっている話をするためには、どうしてもこの質問をしなければなりませんでした」

そこまで言うてから、マリアさんはコーヒーを一口飲む。

そして、落ち着いた様子で話し始めた。

「昨日の夜、新堂くんを襲ったのは人間ですが、その時はただの間ではありませんでした」

「……ただの人間じゃない」

なんとなく予想はついていたが、少しずれた答え。

だが実際にそう言われると、戦慄を覚えずにはいらなかった。

「そうですね。回りくどいことを言わずに説明しますよ。今この辺りで起きている『連続噛みつき魔事件』はご存じですね？ あれは、クラシケ理想狂と呼ばれる存在が発端となっている事件です」

「クラシケ……？」

その言葉に、真っ先に“患者”という言葉が連想される。

あまりにも平凡。

言ってしまうえば、自分が病気になれば医者からは間違いなくそう

呼ばれるであろう言葉。

だが、そこには何か触れてはならないものが覆いかぶさっているような、奇妙な親近感と嫌悪感が折り重なっているような気がしていた。

やがて、マリアさんはゆっくりと口を開く。

「生きていれば、それだけ過去というものの存在が大きくなります。今日こうして生きていることさえも、明日になれば過去になる。今こうして話していることすらも、1秒後には過去となります。人は、未来に対して大きな希望や願いを胸に生きていく存在です。けど、見えない未来よりも、実際に生きてその足で歩んできた過去の方が巨大で重くなってしまうのは、代えがたい事実でもあります」

神妙な面持ちと穏やかだが力の籠った口調。それは、この部屋にあるすべてのモノに対して身動きの取れない拘束力を秘めている気がした。

「そして、その過去の幾つかは、その人にとっての“思い出”というものに姿を変えます。そのさらに幾つかが、どんな代償を払ってでも失いたくない“思い出”へと変貌を遂げるのです。理想^{クラシク}狂は、その思い出が失われたとき。または、失われる危機に瀕した瞬間に生まれます」

「思い出が、失われたとき？」

マリアさんが無言で頷く。

「つまり、自分の過去を捨てきれねえで、無様にしがみつくとバカになる病気がつてわけだよ」

今まで黙って話を聞いていた夜桜が、どこか皮肉交じりに言った。

「舞姫さん、口が悪すぎですよ」

注意をするマリアさんに、夜桜は小さな舌打ち混じりに「ほっとけ」と呟きそっぽを向いた。

それを見てマリアさんは小さなため息をつきながらも、話を続けてくれた。

「言い方は悪いですけど、舞姫さんが言っていることは間違いでは

ありません。理想狂は誰でもなりうる可能性を孕んでいる病のようなものですから。わたしも舞姫さんも。そしてもちろん、新堂くんも」

「……」

「脅かしてごめんなさい。でも本当のことなんですよ。思い出というのは、誰でも持つことができるもの。というよりも、生きていればいつかは必ず得られるものです。そして、それを“得た”ということは“失う”という可能性だってあるのですから」

「その失ってしまった過去。思い出を捨てることができずに、どうしても手の中に留めておきたいと願ったとき、そのクランケとかいうのになるってことですか？」

俺はマリアさんの説明をなんとか頭の中で整理し、簡潔に述べる。「そうです。そして、今町で騒ぎを起こしている理想狂の能力は、吸血鬼とよく似ています」

「……吸血鬼」

俺はマリアさんの口から出た言葉を繰り返しながら、昨夜の出来事を思い返していた。

血を落としたように真っ赤に染まった瞳や、人間とは思えない鋭く尖った牙が2本。

そして、あの化け物は自分に何度も同じ言葉を投げかけていた。

『血をちょうだい』と。

襲われていたときも、想像上の怪物をイメージしなかったわけではない。だが、実際に誰かの口からその怪物の名前を口に出されると、言いようのない恐怖心がこみ上げてくるのがわかった。

「昨夜の同じ時刻、まったく別の場所で新堂くん以外にも襲われた人たちがいるということをご存知ですか？」

そう問いかけられて俺は、今朝竜成が話していた噛み付き魔事件のことを思い出し、黙って頷く。

「一般的なイメージでは、吸血鬼に噛まれた人は吸血鬼になるというふうに言われていますね。今回の理想狂も、おそらくその力を持

っているのでしょう。発端となった親の吸血鬼が誰かに噛みつき吸血行為を行った。そして吸血行為をされた相手はいわゆる子の吸血鬼となり、他者を吸血行動で攻撃する、」

「ちょ、ちょっと待ってください！ 噛まれた人が吸血鬼になるってことは、昨日俺のことを襲った化物みたいなのが……」

「そうです。ニュースや新聞に載っていることが本当だとしたなら、昨日だけでも3人の吸血鬼が誕生したことになります」

冷静な口調で告げるマリアさんとは対照的に、俺はその事実のあまりの恐ろしさに足がすくんでいることを自覚してしまった。

昨日、俺のことを襲った化物。いや、吸血鬼。

1人だけでも十分すぎる絶望感と恐怖心を植え付ける空想上の怪物が、今この町に3人……いや。マリアさんの言っていることが本当だとしたら、今まで被害にあった人たち全員が吸血鬼になっているということになる。

そして、その人たちもいずれ吸血衝動という渴きに耐えることができなくなり、誰かを襲う。

その襲われた誰かもまた、正体不明の渴きに苛まれ吸血行動に走る。その被害にあった人間もまた……。

想像しただけで背中に氷水でも当てられたような寒気が走った。

夜桜が口に使っていた「ガキ」という言葉の意味。それを知ってしまったのだから。

「けど、舞姫さんのおかげで少なくとも1人は吸血衝動から解放することができましたけどね」

膨らんでいく絶望的なイメージに苛まれている俺を励ますかのように、マリアさんが言った。

「どういうことですか？」

「ふふつ、何を言っているんですか新堂くん？ その目で見たのではないですか？ 舞姫さんが、子を切り伏せる瞬間を」

いたずらっぽく笑いながら、マリアさんがそう口にする。

そう、俺は見ていた。

なにもない空間に青白い光が放たれ、そこから白銀色に輝く刀を引き抜いたのを。そして、それで迫りくる吸血鬼を切り伏せたところを。

だが……、

「……殺したんですか、やっぱり？」

俺はその疑問に対する恐れを、マリアさんにぶつける。

だが、それに答えたのはマリアさんではなく、いつの間にか気だるそうにソファに寝転がっている夜桜だった。

「お前さあ、人の話聞いてたかよ？ 私の刀じゃ肉体そのものは殺せないって言ったじゃねえか」

「肉体そのものは殺せない……？」

「そうだよ。つまり、私が斬ったのはあの女そのものじゃなくて女の中にあった症状っつーことだ。死んじやいねえよ。今頃会社で残業にならねえように頑張つてんじやねえの？ まあ知らねえけど」

あまりに当然のようにそう告げる夜桜の言葉に、俺はなんとか返す言葉を探していた。

「つまり、新堂くんが心配しているようなことは起きていないという事ですよ」

だが、それを見つける前にマリアさんが俺の考えを見透かしたかのように口を開いた。

整理すると、夜桜の刀はクランケという存在に関わる者。さらにその者の中にある能力のみを斬ることができるらしい。

昨日、彼女が使った刀に一滴の血も付いていなかったのはそのせいだろう。

やがて、マリアさんが再び口を開き話が再開される。

「私たちは今回の件で最初に襲われたのが女性であることから察するに、親の吸血鬼は男性だと考えています」

「え、どうしてですか？」

「これは創作上よく使われる設定なのですが、吸血鬼の吸血衝動というのは人間が異性に対する性的興奮と似たようなものなのだそう

ですよ。新堂くんを襲った吸血鬼が女性だったのもそのせいです」

「ああ、なるほど……」

告げられた事実には、俺はただ納得する。

「じゃあ、今はとにかくその吸血鬼を探しているってことですか？」
「その通りです。基本的に理想狂の力は根本となっていて存在を叩くことで消滅します。理想狂の能力。つまり思い出が失われた以上その影響もなかったことになります。それができるのが、舞姫さんの持つ刀の力なのですが……」

そこまで言っつて、マリアさんは急に表情を曇らせる。

「マリアさん？」

俺が呼びかけると、マリアさんは言いにくそうに口を開いた。

「実は、理想狂の力を根絶するためにはその能力の大元となっている過去を理解していなければならぬのです」

「過去を、理解？」

「はい。理想狂になるということは、失いたくなかったものを失った。または、失いかけているものを必死で繋ぎとめようとしているということに他なりません。夜桜さんの持つ刀は、あくまでも“力を殺す”というもの。やみくもに斬りつけたところで意味はなく、その人が抱えている心の深い部分に目を向けて、斬撃が届く場所までそれを手繰り寄せなければ斬ることはできないのです」

「“クランケ”って言葉の意味考えりゃあ簡単だろうが。心臓がやべえ患者には手術が必要だろ？ でも、体かつさばかねえで心臓いじれるか？」

マリアさんの説明に続くように、夜桜も口を開いてそう告げてきた。

「いや、でも昨日は……」

刀で斬れたじゃないか。と、言いかけて夜桜がそれを遮る。

「ありゃあ元凶になってる吸血鬼じゃねえからやれた芸当なんだよ。理想狂になってる野郎の思い出なんか、噛みつかれた連中からすりゃあ全くもって無関係だからな。過去もクソもねえんだよ」

「な、なるほど……」

荒々しい夜桜の口調に気圧されて、俺はそれ以上夜桜に質問する気にはなれなかった。

俺は仕方なく、マリアさんに再び問いかける。

「つてことは、元凶になつてるクランケを見つけたとしても、その人が持つてる思い出を知ることから始めなきゃならないつてことですか？」

「その通りです。けど、理想狂は一度傷ついた過去にすがりつくことで発現するものですから、思い出したくはない悪い思い出であることや他人にそう簡単に悟られたくないことがほとんどです。それを教えてくださいと言ったところで、素直に教えてもらえる可能性は低いでしょうね」

マリアさんは少し困つたような笑みを浮かべながらそう言った。

ここまで、実際に体験してなければまず信じることのできない事実をたくさん聞かされ、俺はただ立ち尽くす。

思い出が異能に変わる……。そんなことが本当にあり得るのだろうか？

一瞬そんなふうに疑つてみるものの、すぐにその疑いは薄れてしまふ。

なぜなら、俺は実際に経験しているからだ。

絶望的なまでの死の恐怖を。

そして、あまりに現実離れた夜桜舞姫という少女の起こした行動を。

自分で知ることを望んだ事実とはいえ、入学式当日の朝の何気ない日常を過ごしていた自分を思い出し、俺は聞いてしまったことを少し後悔していた。

踏み込んでほならない濁りきつた水たまりに足を踏み入れたせいで、そのなかで蠢く何かに足を絡めとられ、二度と抜け出せなくなってしまうような感覚にさえ襲われている自分に気づく。

「ビビったか？」

そんな俺の心を見透かしたように、夜桜が不敵な笑みを浮かべながらそう聞いてくる。

「……悪いかよ」

俺は否定することもなく、正直に自分の気持ちを述べる。

すると、夜桜は呆れたような溜息を吐き、天井を仰ぐ形でソファに座りなおしながら、

「だから関わるなっつったんだよ、バカが。あのなあ、知ったところで手前^{テメエ}に何ができるっつーんだよ？ 昨日だって、私が行かなかつたら殺されるか連中の仲間^{テメエ}にされるのを黙って待つてるしかなかつたくせに。手前みたいなお人好しが結果的にバカ見ることになるんだよ」

「……ッ」

これだけ言われても、俺は何も言い返すことができなかった。

当然だ。夜桜の言うとおり、俺はこの事実を知ったところで何かをすることはできない。そればかりか、下手に首を突っ込めば自分が痛い目を見るだけではなく、2人の足手まといになることは間違いなかった。

その事実を改めて認識し、自分の無力さにただ拳を握るしかない自分があることがひどく悔しかった。

「それくらいにしておきなさい舞姫さん」

不遜な態度で笑っている夜桜に、マリアさんは幼い子供をしつけるように言う。

「まったく、昔は『マリアお姉ちゃん！』って抱きついてくる可愛い子でしたのに……」

「え、夜桜とマリアさんってそんな昔から知り合いなんですか？」

マリアさんの口から出てきた意外な一言に、俺は思わず顔を上げた。

「わたしは舞姫さんが夜泣きをしていた頃から、ずーっと成長ぶりを観察してきましたよ」

俺の素朴な疑問に、マリアさんは悪戯な笑顔を浮かべながら答え

た。

「そうそう、舞姫さんはね、たしか……6歳のころでしょうか？」

お父様が飲んでらしたものをコーラだと勘違いして飲んだらそれがブラックコーヒーで、あまりの苦さに大泣きしたことがあるんですよ。それがトラウマになって、舞姫さんはいまだにココアが限界なんですよね？ だからわたしが入れて差し上げたのも、実はコーヒーではなくミルクたつぷりのココアで……」

「余計なこと言ってんじゃねえぞ、マリアあッ！！」
堪忍袋の緒が切れたのか。

夜桜はソファから立ち上がり、元から細い双眸をさらに細め殺意むき出しの様子でマリアさんを睨みつけている。

やや顔が赤くなっているのは、怒りからか。それともまさかとは思うが……恥じらっているからか？

俺はマリアさんから聞かされた話に触発され、思わず夜桜の目の前に置いてある空っぽのグラスに視線が向いてしまっていた。

「おい、手前エ……」

「……！？」

声のした方を見ると、夜桜の視線まっしはいつの間にか俺へと向けられていることに気づいた。

「誰の許可を得て私のグラス見てやがんだ……。あ、あ、？」

「い、いや……えっと、その……！」

俺は生命の危機を感じ、必死で弁解の言葉を探そうと試みるが見つからず、ただ慌てふためくことしかできなかった。

そもそもコーヒー（だと思っていたココア）の入っていたグラスを見るのに許可なんかいるのか？

そんな答えの見える疑問が頭に浮かんだが、そんなことを言ったらきつと殺されると思ったので飲み込むことにした。

「はいはい、お二人とも。仲がいいのは結構ですけど、話がかかり逸れてしまいましたのでそろそろ戻しましょうか」

そんなことを言い出したのは、この発端を作りだしたマリアさ

んだった。

っていうか、仲がいいって……。

「ぎっけんな！ 手前が私の昔話なんざ引つ張り出しやがるからこうなっただるオがッ！」

今にも噛みつくのではないかというような勢いで、夜桜がマリアさんに啖呵をきる。昨夜の神々しさはおろか、普段の夜桜が纏っている美しさすら今は面影がない。

だが、今回は夜桜にも同意だ。

この人、いい加減大人なのか子供なのかわからない……。

マリアさんのペースに流されてしまったのか。夜桜も納得いかな様子ながらも、自分が座っていたソファに乱雑に腰をかけなおした。

とりあえず、俺も生命の危機は脱したようなので安堵する。

「マリアさん、あなたこそ少しマイペース過ぎやしませんか」

俺は何か言ってるやらないと気が済まず、あまり語調を強めないように心がけながらジト目でマリアさんを睨んだ。

「ふふっ、すみません。こんなに楽しいのは何年か振りだったものですからつい」

言いながら笑うマリアさんには、またしても大人の気品が戻っていた。

悪い人じゃないのはわかるが、話していると調子が狂わされそうな人であることも間違いなさそうだ。

「さて、話を戻しましょう。今までの事例から考えると、理想狂が動き出すのは深夜0時を回ったあたり。吸血鬼が活動するには都合な時間帯ですね。そういうわけですから新堂くん、しばらくあまり遅い時間に外に出るのは控えてくださいね」

言われて俺は、黙って頷く。

これがクランケなんていう得体のしれないものが引き起こしている事件だとは知らされなくても、連続噛み付き魔事件そのもののせいで夜間の外出は控えていたのだ。

昨日のは緊急事態だったとして、その点に関しては問題ない。だが、俺は最後に残った疑問を2つだけマリアさんに聞くことにした。

「マリアさんは、何だと思えますか？」

「はい？」

「その……、人が吸血鬼になってしまふような思い出って」

俺の問いに、マリアさんは首を横に振りながら答える。

「わかりません。でも、きつととても大きくて、希望に満ちていて一度手放してしまったらもう拾い上げることは困難な。そういう思い出であることは確かだと思いますよ」

マリアさんの答えに、俺は黙って目を伏せる。そして、

「マリアさんには、ありますか？」

「……思い出、ですか？」

「……」

あまり広くはない図書館の事務室に、しばしの沈黙が流れる。

やがてマリアさんは口を開き、

「ありません。そして、これからもきつと出来ません」

「え？」

「わたしはもう、思い出を抱くことに疲れましたから」

それだけ言うとマリアさんは、俺に笑顔を向けて、

「英語の課題、頑張ってくださいね。返却は2週間後ですよ」

そんなことを言った。

第二章 理想に狂うモノ？

沈みかけている陽が、地面を這う長い影を作り出す帰り道を1人で歩いている。

図書館を出てからもうだいぶ経つというのに、俺の頭の中はクラシケのことでいっぱいだった。この調子じゃ、家に帰っても英語の課題なんかやってる気分じゃないだろう。

途中、眠そうな表情で歩くスーツ姿の男性とすれ違った。

それを見た俺は、条件的に理想狂と関連付けてしまう。

被害にあった人は、翌日から夢遊病によく似た症状に悩まされているのだ。

俺も間違いなくそのことに関して気味が悪いと感じていたのだが、理想狂の話聞いてからはその理由も何となくわかってしまった気がする。

被害にあった人は、きっと無意識のうちに吸血衝動に駆られて町をさまよっているのだ。

そして、自分の記憶に覚えがないまま自宅ではないどこかで目を覚まし、口の周りが血まみれになっていることに気づく。

そんな俺も、昨日夜桜が来てくれなかったら出口の見えない地獄にたたき落とされていたかもしれない。

考えるだけでもゾツとする。

だが俺は、人を吸血鬼に変えてしまうような思い出が存在するということを、にわかには信じられなかった。

マリアさんが言っていた、「とても大きくて、希望に満ちていて一度手放してしまったらもう拾い上げることは困難な思い出」。

そんなものを抱くことができていた人。きつと、とてつもなく心が豊かで、自分の生き方に一切の迷いは無いような人なのかもしれない。

それが、人を化物へと変貌させる怪物に変わってしまう。

なんて恐ろしい……。いや、恐ろしいよりも残酷な話だ。

人が守りたかった何かを取り戻すための代償が、ただの人として生きることができなくなることなのだから。

考えたところでどうにもならない思いを巡らせつつ、十字路の角を右に曲がったときだった。

「ん？」

壁伝いにうずくまっている人影が1つ。

一瞬、昨夜の光景と重ねてしまったものの、すぐに勘違いだと気づくことができた。

そこにいたのは小学生くらいの女の子だった。

ひざを擦りむいてしまっているようで、痛々しい傷からわずかに血が滲んでいるのが見える。

「きみ、ケガしてるの？」

聞いてみると、嗚咽を漏らしながらも無言でうなずいてくる。

「あ、ええと……」

そこまでしておきながら、自分で困惑してしまい思わず周囲に人がいないか見回してしまう。

なにもせずに立ち去ってしまうのは後ろめたく思い声をかけてみたものの、どうしたらいいのかわからない。

けがをしているといっても、正直言っただけですりむいた程度のケガだ。いくら泣いているからといって、病院に連れていくなんて大げさすぎる。

かと言って、何か応急処置ができるようなものだって持っていない。

自分の意思で起こした行動だというのに何をやっているんだ俺は。これじゃ自己満足じゃないか。

小さな女の子を前にして、自分自身にそんな一抹の情けなさを覚えてしまっていたときだった。

「あの……、どうかしましたか？」

背後からかけられた声。

それに反応するように振り返ると、そこには大学生くらいの青年が立っていた。

童顔気味の顔立ちときれいに整ったショートヘアーが、人の良さそうな印象を醸し出している。

服装も無地の白いシャツにジーンズという清潔感のある格好だ。

「あ……はい。僕が通りかかったらひざを押さえて泣いてたものですから声をかけたんですけど……」

どうしたらいいかわからなくて……といった様子で目を細めながら言うと、彼は女の子のほうへ視線を移す。

少し考えるようなしぐさを見せたあと、彼は何かを思い出した様子でズボンのバックポケットから財布を出し、その中から絆創膏をひとつ取り出した。

そして女の子の前にしゃがみこむと、持っていたハンカチで傷口を拭きながら話かけ始める。

「大丈夫？ 痛かったね」

彼の言葉に、うつむいていた顔を少しずつ上げ始める女の子。

「待ってて、もうすぐ終わるからね。きみ、小学校1年生？」

聞かれて女の子は、鼻をすすりながら「うん」と頷く。

何気なくそう聞いたように見えたが、よく見ると女の子はピンク色の真新しいランドセルを背負っていた。

俺は声をかけることに夢中で全く見ていなかったのに、この人はすごく人のことを見れている。

そのあとも新入生だねとか、学校は楽しい？とか、何気ない話を続けているうちに涙で曇っていた女の子の表情に、少しずつだが笑顔が宿り始めていくのが見て取れた。

「はい、おしまい！ よくがんばったね」

そうこうしているといつの間にか手当は終わったらしく、女の子の頭をやさしく撫でていた。

「家に帰ったら、ちゃんとお母さんに消毒してもらおうんだぞ」

笑顔で言う彼の言葉を聞くと、女の子は元気な返事とともに「あ

りがとう、お兄ちゃん」と残して去って行った。

しばらくその背中を見送ったあと、俺は彼の方に向き直る。

「ありがとうございます。声をかけるのに夢中で、そのあとどうしたらいいのかわからなくなってしまっ……」

自分の不甲斐なさを詫びつつお礼を言うと、彼は両手を振りながら焦った様子で返してくる。

「ああ、いやいや。ぼくも偶然通りかかったただだからさ。気にしないですよ」

「いえ、とても助かりました。親切な人が通りかかってくれてよかったです」

俺は思ったままのことを言った。

それに、見た目の印象もさることながら、泣いている女の子とそれを前に困惑している男を見て放って行ってしまわなかった手前、素直に悪い人では無いと思えたのだ。

「……遠夜昏人」

「え？」

唐突に右手を差し出ししながら言われ、俺は間の抜けた声を出してしまっ。

「ぼくの名前だよ。黄“昏”る“人”って書いて昏人だ。こうして出会えたのも何かの縁だ。名乗っておいて損はないだろ？」

言いながら昏人と名乗る青年は、柔らかな笑顔を向けてくる。

それに応えるように、俺も自分の名前を名乗りつつ差し出された手を握った。

「真護くん、か。いい名前だね」

「はあ……。えっと、ありがとうございます」

昏人さんの褒め言葉に、俺は何となくむずがゆい気持ちになってしまった。名前を褒められたことなんかほとんどない。いや、多分初めてだろう。

俺は何となく、昏人さんの名前にも何か言ったほうがいい気がしてしまい、口を開く。

「昏人さんも、なんていうかその……、いい意味で変わってますよね。覚えやすいつていうか」

率直な意見を述べてみる。

“昏人（くらうど）”なんて名前の人はそうそういないだろうから。

そして、その言葉に対し昏人さんは笑顔のまま言う。

「ありがとう。最高の褒め言葉だよ」

「最高……?」

昏人さんの言っている言葉の意味がよくわからず、首をかしげる。

「いや、いいんだ。こつちの話だよ」

だが彼は手をかざしながらそう取り繕ってきたので、俺もそれ以上聞かないことにする。

やがて近くにある公園の時計を見ながら、気がついたように口を開いた。

「それじゃあ、ぼくはこれから大事な仕事があるから、これで失礼するね」

「あ、はい。本当にありがとうございました」

俺は再度頭を下げ、自分の自宅に向けて歩き始めた。

なんとなく振り返ってみると、そこには既に昏人さんの姿は見当たらなかった。

まるで、空気のように消えてしまったかのように。

第二章 理想に狂うモノ？

夕食を終え、しばしの休憩のあと机に向かう。

借りてきた参考書を開いてからすでに2時間近く経ち、ようやく半分ほど埋まったところだった。

どうにも集中できない理由はただひとつ。放課後の図書館で聞いた思いもよらない事実がいまだに頭から離れないせいだ。

そして、そこから明るみに出てきた自分自身の生き方。

悩み続けたところでどうにもならないのはわかっている。

けど、気がつけば考えてしまっている。

「失いたくない思い出、か」

何があっても手放したくない、過去の記憶。

時に、人を空想上の化物にさえ変えてしまうほど重くて大きい。

そして、ゆずれないもの。

……俺は考えていた。

そういうものを手放したり傷つけられたりしたのなら、それだけ悲しくて辛い思いをした。それが、本当に危ないところまで追いつめられたことがあるのだろうか。

失うことには痛みを伴う。

悲しみや怒り。

あらゆる負の感情が、その人間の心を支配していく。

やさしい色をしていた。美しかった思い出が黒く染まっていく。

もしそれが起爆剤になり、常人以上の力を手に入れるのだとしたら……。

だったら、俺もあの時……

「……いや、違うよな」

自分に言い聞かせるかのように呟く。

俺はこのとき、自分が死んでも失いたくない。化物なってでも守りたい思い出を探すうちに、あることを思い出していた。

けど、それは違うことにすぐ気がつく。

アイツは、俺が助けたわけじゃない。

たしかに失いたくない大切な“人”ではある。

それに、失ってしまったわけじゃない。確かに今、俺の近くで色あせることなく生きていてくれている。

だから、あれは思い出というよりも“悪夢”と呼んだほうが正確かもしれない。

悪夢なら、それ以上悪くなることはないのだから。

失うも壊れるもないと思う。

「……だめだな」

俺は1人しかいない部屋でそう呟いたあと、手に持っていたペンを置いて、あくび交じりの背伸びをする。

本当は早めに終わらせたほうがいいんだろうけど、こんな状態じゃ課題なんて集中できない。

少し気分転換をしようと部屋を出て、リビングにあるテレビを点けた。

時刻は9時少し前。

「あれ。そういえば、今日からだったかな？」

そこで俺はあることを思い出し、テレビの画面に番組表を表示させてみる。

そして、すぐに自分の記憶違いではないことがわかった。

俺のしている欄には、今日からスタートする新ドラマのタイトルが表示されていた。

人気の男性アイドルを主演に起用した探偵もののドラマである。

渚沙や竜成には「つまらなそう」の一言で片づけられてしまったが、俺は番組の宣伝をしていたころから少なからず内容には興味を持っていた。

ちようどいい気晴らしが見つかったことに喜びを感じつつ、飲み物を入れに台所へ向かう。

俺がリビングに戻り、ソファに座ったとほぼ同時にドラマがスタ

トした。

放送開始30分弱。

俺は、渚沙たちの意見が正しかったことを身をもって思い知らされていた。

ドラマが始まってから、もう何度あくびをしたのかもわからない。ハッキリ言って、面白くもなんともないのだ。

いや、物語そのものは面白いのかもしれない。だが、主演アイドルの演技力がそのすべてをダメにしているのは明らかだった。

わきを固めている名の知れた役者のうまさがいっつも以上に際立っている。

「……あんまり気晴らしにならなかったな」

思わずそんなことを呟いてしまう。

もう犯人が誰なのかとか、犯行の動機は何だったのかとか、このドラマの一切に対する興味が失せてしまっていた。

俺はテレビを消そうとリモコン手に取り、電源ボタンに指をかけた。

だが、あるものが目に入り、俺はボタンを押すのをやめた。

目に留まったのは、警察官が青年に聞き込みをしている場面のようだった。

「この人、って……」

その青年に、俺は見覚えがあったのである。

いや、見覚えどころではない。つい数時間前に会話をした記憶すらあった。

実際に顔を合わせたときに感じた穏やかな印象。

物語の中でも、遠夜昏人はその雰囲気崩さずに居た。

第三章 忘れられた吸血鬼 ？

駅へと続くデッキにあるベンチで人を待っている。

今日は日曜日。デート中のカップルや買い物へ向かう家族などが、駅の中に流れ込んでいく光景がよく見えた。

俺たちの住んでいる辻崎という町。そこから電車で一本の倉浜駅の目の前という立地に、一週間ほど前から超大型のショッピングモールがオープンしているのだ。

誰でも一度は名前を聞いたことのあるファッション専門店や服飾雑貨店はもちろん。

カフェやレストラン。スポーツ洋品店にレンタルDVD店まで入っているという、とにかくそこにいけば買い物に困らないと言っても過言ではないスケールだ。

まだオープンして間もないこともあり、しばらくは賑わいを見せることが予想されるだろう。

先ほどから駅に流れ込んでいく人たちも、おそらくそこが目当てだ。

……と言つても、これから俺もそこへ向かう人たちの波に巻き込まれる1人なわけだが、誘ってきた相手がいまだに姿を見せない。

だが、待ち合わせに遅れてもうすぐ10分経つというときだった。

「おおーい！ 真護まもろーツ！！」

聞き覚えのある呼び声が一人。

声のした方に目を向けると、悪気のない笑顔を浮かべながらこちらに走ってくる少女が一人。

白のシャツにデニム地のショートパンツという、4月半ばにしては薄手の格好だが、実に動きやすそうな格好だ。活発そうな印象も受ける。

幼馴染にして、俺を誘ってきた張本人。まぎれもなく千晶ちあきら渚沙らしい格好だ。

ベンチの前まで全速力で駆け抜けてくると、無駄がなくキレイなフォームでピタリと止まり、敬礼のようなポーズでこちらに笑顔に向けてくる。

「お待たせッ！ 待った？」

「自分から誘っつといて遅刻するなよな」

「ゴメンゴメン。昨日準備してた靴、履いてみたらイマイチでさ。選んでたら時間かかっちゃって。でもさあ、ちゃんと全力疾走でここまで来たんだよ？ 偉いと思わない？」

俺が抗議してみるも、渚沙は笑ってごまかしながら言う。

まあ、渚沙のこういう大雑把なところは今に始まったことじゃない。どちらにせよ、この程度のことであまりグズグズ言うこともないだろう、が……。

「ほら、何やってんの？ 早く行くよ！」

遅れてきたはずの渚沙が、あたかも自分の方が早く来たかのような物言いをしてくる。

おかしい、待たされたのは俺の方はずなんだけどなあ……。

こういつも主導権を握られてしまう自分って……、と思ってしまったことがあるのも事実だ。

そんなことを考えているとは露知らず、俺を置き去りにしてマイペースで駅の中へ消えてゆく渚沙。俺も、内心やれやれと思いつながら、すぐにその後を追いかけた。

改札を抜けてホームに降りると、ほどなくして電車が到着した。

ドアが開くと同時に、ホームで待っていた人たちに紛れて電車に乗り込み、反対側のドア付近まで進んだところで立ち止まる。

ドアが閉まったのとはほぼ同じくして、渚沙が口を開いた。

「今日観る映画ってさ、わたしたちが小学校に通ってた頃にやってたのをリメイクしてみたいだよ。うちのお母さんが言ってた」

「へえ、そうなのか」

解説めいたことを言われたので、そう相槌を返す。

実は、俺たちは買い物が目的なのではなく、今日公開の映画を観

に行こうとしているのだ。

吸血鬼の少年と人間の少女の恋を描いたラブストーリー。

言うまでもなく、女子高生層をターゲットにしたものである。

俺も「存在は知っている」という程度の認識はあったが、自分はもちろん、そういうのが好みの友人もいないので、きつと観に行くことはないだろうと思っていた。

だが二週間程前、時代劇やアクション映画にしか興味がないはずの渚沙が、建設途中のショッピングモールに映画館が出来るとわかつた途端、この映画を観に行こうと誘ってきたのだ。

アクションなどとは無縁の映画を突然観に行きたいと言い出したことに、多少の疑問を覚えたものの、特に嫌いなジャンルと言うわけでもないし、幼馴染の気まぐれだと思って聞き入れることにしたのだ。

けど、今は少し後悔している。

正直このタイミングで、“吸血鬼”がどう人間の女の子との恋に奔走しようが、感動できる気がしなかったからだ。

そんなことを考えながら、俺は渚沙の方に目を向ける。

そこには、いつもと変わらぬ楽しげな笑顔が浮かべられていた。

まあ、こんなに楽しそうに笑ってるやつの横で、嫌な顔なんかできないもん。

そう思いながら、俺は自分の口元が自然に綻んだことに気が付いていた。

「あ、そうだ」

渚沙が何かを思い出したように口を開く。

「リメイク前の元になってる映画なんだけどさ、公開当初はすごいブームになったみたいだよ。吸血鬼役だった若手の俳優さんもかなりブレイクしてたみたい」

「へえー。……“してた”ってことは、今はそうでもないのか？」

渚沙の言い回しに、俺はそんな疑問を投げかける。

「うん、そうみたい。私たちが知ってるような有名な人じゃないみ

たいだし。もう何年も見てないらしいよ。その頃はドラマとかバラエティに引つ張りだこだったみたいだけど……まあ、ああいう世界だからね」

渚沙が少し、言葉を選ぶそぶりを見せながらそう答えた。

詳しく知ってるわけじゃないが、いわゆる芸能界という世界は、浮き沈みの激しい世界だとよく耳にする。

つい先日まではスターだった人が、気づくと全く見なくなってしまうなんてこともよくある話。とてもじゃないけど、俺は頼まれたって飛び込む自信はないと思う。

そんな会話を交わしていると、電車は目的地の倉浜に到着した。駅前広場に出ると、すぐに噂の建物が目に入ってくる。

階層自体は3階までしかないようだが、敷地面積はかなり広い。ドーム球場2つ分くらいはあるのではないだろうか。

どんな店があるのか見てみたい気持ちはあったが、映画の時間に合わせてこちらに来てしまったので、まっすぐ映画館に向かう。

映画館のチケット売り場には、すでに長い行列ができていたものの、渚沙が3日前にチケットを購入してくれていたことが幸いし、列をスルーして入ることができた。

……しかし、3日も前からチケットを買いなんて。よほどこの映画が楽しみだったのだろう。

待合ホールに入ると、すでに俺たちが観る映画の入場が開始されていた。

入っていく人の群れを見ると、やはり同世代の女子ばかりがいるように見える。

「覚悟はしてたけど……、やっぱり女の子ばっかなんだな」

「そんなことないわよ。ほら、アレ」

場違いな空気感を思わず口に出してしまった俺に向かって、渚沙が列を指しながら言う。

そこには、仲睦まじく手をつなぐ男女の姿があった。

「男だっちゃんというじゃない」

当然のごとくそう告げる渚沙に、俺はやや呆れた様子で返す。

「そういう問題じゃないだろ。しかもアレ、どう見ても恋人同士だし、手を繋いでたって何も不思議なことなんかないだろ」

「そりゃそうだけど、わたしが言いたいのはそういうことじゃないの」

「ん？」

「気にしすぎだっての。今どき草食系男子なんて珍しくもないんだから、あの手の映画を男が観てたって、誰も気にしないわよ」

「まあ……、そうだけど」

「それに、黙ってれば、わたしたちだってどう見たって恋人同士にしか見え……、」

そこまで言って、渚沙は突然言葉を途切れさせた。

かと思つと、今度は火が出るのではないかというくらい顔を真っ赤にし、俺の方へ向きながら、

「ち……っ違うからねっ?! 別に、ア……アアア、アンタとこ、ここ……ッ、恋……、人同士に見えるのが嬉しいとかじゃなくて

!! あ、でも……その……。別に、嫌なわけ……じゃ、ない……ケド……」

「渚沙？」

なぜかしどろもどろになっている渚沙を落ち着かせるために、俺は一応声をかけてみるが、

「う……!! うるっさいバカ!! アンタのせいでしょっ!!」

理不尽な上に、迫力も兼ね備えている、渚沙の罵声にも似た抗議が飛んできた。

思わずたじろぐ俺。

やがて渚沙は、若干涙で濡らしている(ような気がする)目を伏せながら、うしろのポケットにしまってあった財布を取り出す。

そして、中から500円玉を出し、俺に差し出してきた。

「……アップルジュース」

「え？」

「だから、アップルジュース！ 先に入ってるから買ってきて」
そう言いながら、強引に俺の手の中に500円玉を握らせ、振り返らず先に歩いて行ってしまった。

状況を見ていたのか。チケットを切る係員の女性が、罪人を見るかのような目で俺を睨んでいるのが見えた。

「……またやつちやっつたのかなあ、俺」

俺はその場に立ち尽くしているのが辛くなり、半ば逃げるようにして売店へと向かいながら、ため息交じりに、そんな独り言をつぶやく。

白状すると、俺はしばしば渚沙を怒らせることがあった。

その大半が、今日みたいに些細なことなのだが、その前後に俺に不用意な言葉が無かったかと聞かれれば、無いとは思っていても素直に頷けないむず痒さがあるのも事実だ。

だから、何がまずかったのかわからず聞いてみたこともあるけど、渚沙は答えてくれない。

ある意味、悩みの種でもある。こう毎回わけもわからず怒られてたんじゃ、俺だって変に気を遣ってしまう。

……だが実際のところ、事態はすぐに終息に向かってくれるのも毎回のことだった。

2人分の飲み物を買って、チケット係の女性の刺々しい視線に耐えながら劇場内へ入る。

渚沙はすぐに見つけることができ、迷うことなく隣の席に座ることができた。

そして、視線は向けずに飲み物だけを差し出しながら、

「ホラ。アップルジュースで良かったんだよね？」

「あ、……うん」

小さな声でそう呟き、渚沙が俺の手からアップルジュースの入った紙コップを受け取る。

だが、渚沙はそれを飲むこともしなければ、ドリンクホルダーに入れもせず、黙ったままじっと紙コップを見つめている。

俺も特に話しかけずに、スマートフォンを落としたりしていた。

会話も交わさない気まずい空気が、しばらくの間漂い続ける。

やがて、渚沙が手に持ったままのアップルジュースを一口飲み、言いにくそうな様子で口を開いた。

「……ごめん」

謝った理由はわかってる。

けど、俺はほんの小さなお返しのもりで、意地悪気に聞いた。

「ん、何が？」

「だ、だから……、その。……急に怒ったり、して……」

渚沙は、それに対して少しもじもじしながら言った。

そんな渚沙の様子を見て、俺も少し笑う。

そして、小さな子に説教をするように、

「謝るくらいなら、最初から理不尽な怒り方なんかしないこと」

「わ、わかってるよ！ わかってる、ケド……」

何かを言いかけて、渚沙は不意に言葉を中断する。

気のせいだろうか。一瞬、何かに迷ったようなそぶりを見せた気がしたが。

だが、やがていつもの明るく、やや茶目つけのある笑顔に戻っていく渚沙。

そして、どこか開き直った様子で言う。

「……うん、そうだね！ ゴメンゴメン！ とにかくさ、さっきのはもう忘れてね」

その言葉を聞き、俺もようやく心の底から安心できた。

……やっぱり。こいつには、悲しい顔をしてほしくない。

俺たちの間に出来ていた妙な緊張感が消え失せてから間もなく、

明るかった劇場が少しずつ暗転を進めていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5540x/>

メモリアリストの護神

2011年12月14日00時46分発行